

五重塔

幸田露伴

青空文庫

其一

もくめるわ 木理美しき 槻 洞、縁にはわざと 赤檜を用いたる岩畳作り
 の長火鉢ながひばちに対して話し敵むかもなくただ一人、少しは淋さびしそうに坐すわ
 り居る三十前後の女、男のように立派な眉まゆをいつ掃はらいしか剃そつた
 る痕あとの青々と、見る眼も覚さむべき雨後の山の色をとどめて翠みどりの匂
 いひとしお床しく、鼻筋つんと通り眼尻めじりキリりと上り、洗い髪を
 ぐるぐると酷むごく丸まるめて引裂紙ひっさきがみをあしらいに一本簪いっほんざしでぐいと留とど
 めを刺した色気なしの様はつくれど、憎いほど烏黒まっくろにて艶ある
 髪ふさの毛の一綜ふさ二綜おく後れ乱れて、浅黒いながら洩氣まの抜けたる顔に

かかれる趣きは、年増としまぎら嫌いでも褒めほめずにはおかれまじき風体、わがものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢しれものが随分頼まれもせぬ詮議せんぎを蔭かげではすべきに、さりとは外見みえを捨てて堅義を自慢にした身の装つくり方、柄の選択えらみこそ野暮ならね高が二子の綿入れに繻子襟しゆすえりかけたを着てどこに紅べにくさいところもなく、引つ掛けたねんねこばかりは往時むかし何なりしやら疎あい縞しまの糸織なれど、これとて幾たびか水を潜ひそめて来た奴やつなるべし。

今しも台所にては下婢おさんが器物洗ものう音ばかりして家内静かに、ほかには人ある様子もなく、何心なくいたずらに黒文字を舌端したさきでなぶり躍おどらせなどしていし女、ぷつりとそれを噛かみ切きつてぷいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火てい体よく埋いけ、芋籠いもかごより小巾こぎれ

とり出し、銀ほど光れる長五徳を磨きおとしを拭き銅壺の蓋ま
 で奇麗にして、さて南部霰地の大鉄瓶をちやんとかけし後、石
 尊様詣りのついでに箱根へ寄つて来しものが姉御へ御土産とくれ
 たらしき寄木細工の小繊麗なる煙草箱を、右の手に持った籠
 甲管の煙管で引き寄せ、長閑に一服吸うて線香の煙るように緩
 々と煙りを噴き出し、思わず知らず太息吐いて、多分は良人
 の手に入るであろうが憎いのつそりめが対うへ廻り、去年使うて
 やつた恩も忘れ上人様に胡麻摺り込んで、たつてこん度の仕事を
 しようと身の分も知らずに願いを上げたとやら、清吉の話しで
 は上人様に依怙鼻屑のお情はあつても、名さえ響かぬのつそりに
 大切の仕事を任せらるることは檀家方の手前寄進者方の手前もむ

つかしかろうなれば、大丈夫此方に命こちけらるるにいいつきまつたこと、
よしまたのつそりに命けらるればとて彼奴あれめにできる仕事でもなく、
彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事でかし損ずるは眼
に見えたこととのよしなれど、早く良人うちのひとがいよいよ御用命いいつかつた
と笑い顔して帰つて来られればよい、類の少い仕事だけに是非し
て見たい受け合つて見たい、欲徳はどうでも関かまわぬ、谷中やなか感応かんおう
寺じの五重塔は川越かわごえの源太げんたが作りおつた、ああよくでかした感
心など云われて見たいと面白がつて、いつになく職しやうばい業いに氣の
はずみを打つて居らるるに、もしこの仕事を他ひとに奪とられたらどの
ように腹を立てらるるか肝かん癪しやくを起さるるか知れず、それも道
理であつて見れば傍わきから妾わたしの慰めようもないわけ、ああなんにせ

よめでとう早く帰つて来られればよいと、口には出さねど女房氣質、今朝背面うしろからわが縫いし羽織打ち掛け着せて出したる男の上を氣遣うところへ、表の骨ほねぶとごうし太格子手ああらく開けて、姉御、兄貴は、なに感応寺へ、仕方がない、それでは姉御に、済みませんがお頼み申します、つい昨晚ゆうべへべ酔まして、と後は云わず異な手つきをして話せば、眉まゆがしら頭に皺しわをよせて笑いながら、仕方のないもの、少し締まるがよい、と云い云い立つて幾らかの金を渡せば、それをもつて門かどぐち口に出で何やらくどくど押し問答せし末こなたに来たりて、拳骨げんこつで額を抑え、どうも済みませんでした、ありがとうござりまする、と無骨な礼をしたるもおかし。

其二

火は別にとらぬから此方へ寄るがよい、と云いながら重げに鉄瓶を取り下して、属輩にも如才なく愛嬌を汲んでやる桜湯一杯、心に花のある待遇は口に言葉の仇繁きより懐かしきに、悪い請求をさえすらりと聴いてくれし上、胸にわだかまりなくさつぱりと平日のごとく仕做されては、清吉かえつて心羞かしく、どうやら魂魄の底の方がむず痒いように覚えられ、茶碗取る手もおずおずとして進みかぬるばかり、済みませぬという辞諚を二度ほど繰り返せし後、ようやく乾ききつたる舌を湿す間もあらず、今ごろの帰りとはあまり可愛がられ過ぎたの、ホホ、遊ぶ

はよけれど職業しごとの間を欠いて母親おふくろに心配しんぱいさするようでは、男振
 りが悪いではないか清吉そなた、汝そなたはこのごろ仲町なかつちやうの甲州屋様の御
 本宅の仕事が済むとすぐに根岸の御別荘のお茶席の方へ廻らせら
 れて居るではないか、良人うちのも遊ぶは随分好きで汝たちの先に立
 つて騒ぐは毎々なれど、職業を粗略おろそかにするは大の嫌い、今もし
 汝の顔でも見たらばまた例の青筋を立つるに定きまつて居るを知ら
 ぬでもあるまいに、さあ少し遅くはなつたれど母親の持病が起つ
 たとか何とか方便は幾らでもつくべし、早う根岸へ行くがよい、
 五三様ごさもわかつた人なれば一日をふてて怠惰なまけぬに免じて、見透みすか
 しても旦那の前は庇護かぼうてくるであらう、おお朝飯がまだらし
 い、三や何でもよいほどに御膳ごぜんを其方そちへこしらえよ、湯豆腐に蛤は

まなべ

鍋とは行かぬが新漬に煮豆でも構わぬわのう、二三杯かつこん
 ですぐと仕事に走りやれ走りやれ、ホホ睡^{ねむ}くても昨夜^{ゆうべ}をおもえば
 堪^{がまん}忍のなろうに精を惜しむな辛^{しんぼう}防^{ぼう}せよ、よいは弁当も松に持た
 せてやるわ、と苦^{にが}くはなけれど効^{ききめ}験ある薬の行きとどいた意見に、
 汗を出して身の不始末を慚^はずる正直者の清吉。

姉御、では御^ご厄^{やつかい}介^{かい}になつてすぐに仕事に突つ走ります、と驚^わ

しづか 掴^{しづか}みにした手^{てぬくい}拭^ふで額^{ぬか}拭^ふき拭^ふき勝手の方に立つたかとおもえば、

もうざらざらざらつと口の中へ打^ぶち込むごとく茶漬飯五六杯、早
 くも食うてしまつて出て来たり、さようなら行つてまいります、

と肩ぐるみに頭をついと一ツ^さ下^さげて煙^{きせる}草^さ管^{かん}を収^とめ、壺^{つぼや}屋^やの煙^{りようさ}草^さ
 入^げ三^{さん}尺^{せき}帯^{たい}に、さすがは氣^{かたぎ}早^{はや}き江^え戸^どツ^つ子^こ氣^{かたぎ}質^{しつ}、草^{ぞうり}履^りつつかけ門^{かど}口^{ぐち}

出づる、途端に今まで黙っていたりし女は急に呼びとめて、この二三日にのっそりめに逢うたか、と石から飛んで火の出しごとく声を迸らし問いかくれば、清吉ふりむいて、逢いました逢いました、しかも昨日御殿坂で例ののっそりがひとしおのっそりと、往生した鶏のようにぐたりと首を垂れながら歩行いて居るを見かけましたが、今度こつちの棟梁の対岸に立つてのっそりの癖に及びもない望みをかけ、大丈夫ではあるものの幾らか棟梁にも姉御にも心配をさせるその面が憎くつて面が憎くつて堪りませねば、やいのっそりめと頭から毒を浴びせてくれましたに、あいつのこどゆえ気がつかず、やいのっそりめ、のっそりめと三度めには傍へ行つて大声で怒鳴つてやりましたればようやくびっくりして梟

に似た眼で我ひとの顔を見つめ、ああ清吉あーにーいかと寝惚ねぼけ声の
 挨拶あいさつ、やい、汝きさまは大分好い男児おとこになつたの、紺屋こうやの干場へ夢に
 でも上のぼつたか大層高いものを立てたがって感応寺の和尚様に胡麻
 を摺すり込むという話しだが、それは正気の沙汰か寝惚ねぼけけてかど冷
 やかしやかし語をまつ向からやつたところ、ハハハ姉御、愚鈍うすのろい奴という
 ものは正直ではありませんか、なんと返事をするかとおもえば、
 我わしも随分骨を折って胡麻は摺すって居るが、源太親方を対岸に立て
 て居るのでどうも胡麻が摺すりづらくて困る、親方がのっそり汝きさまや
 って見ろよと譲ゆつてくれればいいけれどもものうとの馬鹿に虫のい
 い答え、ハハハ憶おもい出しても、心配そうに大真面目くさく云つた
 その面がおかしくて堪りませぬ、あまりおかしいので憎にくつ気もな

くなり、篋べらぼう棒めと云い捨てに別れましたが。それぎりか。へい。そうかえ、さあ遅くなる、関わずに行くがよい。さようならと清吉は自己おのが仕事におもむきける、後はひとりで物思い、戸外おもてでは無心の児童こどもたちが独楽戦こまあての遊びに声々喧かしましく、一人殺しじや二人殺しじや、醜態ざまを見よ讐かたきをとつたぞと号わめきちらす。おもえばこれも順々競争がたきの世の状さまなり。

其三

世に栄え富める人々は初霜月の更うつりかえ衣も何の苦慮くるしみなく、紬つむぎに糸織おのに自己おのが好き好きの衣着きぬて寒さに向う貧者の心配も知らず、

やれ炉開きじや、やれ口切りじや、それに間に合うよう是非とも
 取り急いで茶室成就しあげよ待合の庇廂ひさし繕えよ、夜半よわのむら時雨しぐれも一服
 やりながらでのうては面白く窓撲うつ音を聞きがたしとの贅ぜい沢たくい
 うて、木こがらしすき枯凄まじく鐘の音ね氷るようなつて来る辛き冬をば愉こころ
 快よいものかなんぞに心得らるれど、その茶室の床とこいた板削りに飽かん
 礪とぐ手の冷えわたり、その庇廂やまとの大和がき結いに吹きさらされて
 疝せん癩しやくも起すことある職人風情ふぜいは、どれほどの悪い業ごうを前の世
 になしおきて、同じ時候ひとに他とは違い悩め困くるしませらるるものぞ
 や、取り分け職人仲間の中でも世才うとに疎うとく心好き吾うちのひと夫、腕は
 源太親方さえ去年いろいろ世話して下されし節おりに、立派なものじ
 やと賞ほめられしほど確たしか実なれど、寛潤おうようの氣質きだてゆえに仕事も取り

脱はぐりがちで、好いことはいつも他ひとに奪とられ年中嬉うれしからぬ生活くらしか
 たに日を送り月を迎うる味気なさ、膝ひざ頭がしらの抜けたを辛くも埋
 め綴つづった股もも引ひきばかりわが夫にはかせおくこと、婦女おんなの身として
 は他人よその見る眼も羞はずかしけれど、何にもかも貧がさする不如意
 に是非のなく、いま縫う猪いの之のが綿入れも洗い曝さらした松坂縞まつざかじま、丹
 誠一つで着させても着させ栄ばえなきばかりでなく見ともないほど
 針目がち、それを先刻さつきは頑がん是ぜない幼な心といいながら、母様それ其衣
 は誰がのじや、小さいからは我われの衣服べべか、嬉しいのうと悦よろこんでそ
 のまま戸外おもてへ駈いけ出し、珍めづらしゆう暖かい天氣に浮かれて小竿持こさお
 ち、空に飛び交う赤蜻蛉あかとんぼを撲はたいて取ろうとどこの町まで行つた
 やら、ああ考え込めば裁縫しごとも厭氣いとになつて来る、せめて腕の半分

も吾夫の氣心が働いてくれたならばこうも貧乏はしまいに、技倆わざ
 はあつても宝の持ち腐れの俗諺たとえの通り、いつその手腕うでの顯あらわれて
 万人の眼に止まるということの目的あてもない、たたき大工穴鑿あなほり大
 工、のっそりという忌いまい々ましい譚名あだなさえ負わせられて同業中なかまうちに
 も輕かろしめらるる齒痒はがゆさ恨めしき、蔭かげでやきもきと妾わたしが思うには似
 ず平氣なが憎らしいほどなりしが、今度はまたどうしたことか感
 応寺に五重塔の建つということ聞くとや否や、急にむらむらとその
 仕事を是非する氣になつて、恩のある親方様が望まるるをも関わ
 ず胸欲に、このような身代の身に引き受きようとは、ちとえら過
 ぎると連れ添わたしう妾わたしでさえ思うものを、他人はなんと噂うわさするであ
 ろう、ましてや親方様は定めし憎いのっそりめと怒つてござらう、

お吉様はなおさら義理知らずの奴めと恨んでござろう、今日は大抵どちらにか任すと一言上人様のお定めなさるはずとて、今朝出て行かれしがまだ帰られず、どうか今度の仕事だけはあれほど吾夫は望んで居らるるとも此方は分に応ぜず、親方には義理もありかたがた親方の方に上人様の任さるればよいと思うような気持ちもするし、また親方様の大気にて別段怒りもなさらずば、吾夫にさせて見事成就させたいような気持ちもする、ええ気の揉める、どうなることか、とても良人にはお任せなさるまいがもしもいよいよ吾夫のすることになったら、どのようになあ親方様お吉様の腹立てらるるか知れぬ、ああ心配に頭脳の痛む、またこれが知れたらば女の要らぬ無益心配、それゆえいつも身体の弱いと、有情くて

無理な叱言こいごとを受くるであろう、もう止めましょ止めましょ、ああ
 痛うすいも、と薄痘痕のある蒼い顔あおを蹙しかめながら即効紙はの貼はつてある左右
 の顛顛こめかみを、縫い物捨てて両手でおさ圧える女の、齡は二十五六、眼
 鼻立ちも醜うまからねど美味うまきもの食わぬに膩あぶらけ気き少く肌理きめ荒れたる
 態さまあわれにて、檻褸衣服ぼろぎものにそそけ髪しきますます悲しき風情なるが、
 つくづくひと独り歎ずる時しも、台所の劃しきりの破れ障子がらりと開け
 て、母様これを見てくれ、と猪之が云うにびっくりして、汝そなたはい
 つからそこにいた、と云いながら見れば、四分板六分板の切れ端
 を積んで現ありあり然と真似ありありび建てたる五重塔、思わず母親涙になつて、
 おお好い児ぞと声曇らし、いきなり猪之いだに抱きつきぬ。

其四

當時に有名なうての番匠川越の源太が受け負いて作りなしたる谷中感
応寺の、どこに一つ批点を打つべきところあろうはずなく、五十
畳敷格ごうてんじよう天井の本堂、橋をあざむく長き廻廊、幾部いくつかの客殿、
大和尚が居室いま、茶室、学徒所化しよけの居るべきところ、庫裡くり、浴室、
玄関まで、あるは莊嚴を尽しあるは堅固きわを極め、あるは清らかに
あるは寂びさておのおのそのよろしきに適かない、結構少しも申し分な
し。そもそも微々たる旧基を振るいてかほどの大寺を成せるは誰
ぞ。法諱おんなを聞けばそのころの三歳みつご児も合掌礼拝すべきほど世に知
られたる宇陀うだの朗ろう円えん上しやう人にんとて、早くより身延みのぶの山に螢雪けいせつの

苦学を積まれ、中ごろ六十余州に雲水の修行をかさね、毘婆舍那
 の三さんぎ行ぎょうに寂じやく静じようの慧えい劍けんを礪とぎ、四種しつたんの悉しつたん檀だんに濟度の法音
 を響かせられたる七十有余の老和尚、骨は俗界の葷くん羶せんを避くる
 によつて鶴つるのごとくに瘦やせ、眼まなこは人世じんせいの紛ふん紜うんに厭あきて半ねむば睡
 れるがごとく、もとより壞空えくうの理を諦たいして意欲いよくの火炎ほのおを胸に揚げ
 らるることもなく、涅槃ねはんの真まを会えして執しゆう着じやくの彩色いろに心を染ま
 さることもなければ、堂塔おうちを興おこし伽藍がらんを立てんと望まれしにも
 あらざれど、徳を慕い風を仰いで寄り来る学徒のいと多くて、そ
 れらのものが雨露しの凌しのがんに便宜たよりも旧もとのままにてはなくなりしまま、
 なお少し堂の広くもあれかしなんと独語つぶやかれしが根となりて、道
 徳高き上人の新たに規模を大きゆうして寺を建てんと云いたまう

ぞと、このこと八方に伝播ひろまれば、中には徒弟の伶俐りこうなるがみずから奮はつて四方に馳はせ感応寺建立に寄附を勧めて行くあるもあり、働はき顔に上人の高徳を演のべ説き聞かし富豪を懲す憑すめて喜捨せしむる信徒もあり、さなきだに平素ひごろより随喜渴かつごう仰の思いを運べるもの雲霞のごとくにこの勢いをもつてしたれば、上諸侯より下町人まで先を争い財を投じて、我一番に福ふく田でんへ種子を投じて後の世を安や樂すくせんと、富者は黄金白銀を貧者は百銅二百銅を分に応じて寄進せしにぞ、百川海に入ることく瞬またたく間に金銭の驚かるるほど集まりけるが、それより世才たに長けたるものの世話人となり用人となり、万事万端執とり行とうてやがて立派に成就しけるとは、聞いてさえ小気味のよき話なり。

しかるに悉しつかい皆成就の暁、用人頭の為右衛門普請諸入用諸雜費
 一切しめくり、手脱てぬかることなく決算したるになお大金の剩あまれる
 あり。これをばいかになすべきと役僧の円道えんどうもるとも、髪ある
 頭に髪なき頭突き合わせて相談したれど別に殊勝なる分別も出で
 ず、田地を買わんか畠はた買わんか、田も畠も余るほど寄附のあれば
 今さらまたこの淨財をそのようなことに費すにも及ばじと思案に
 あまして、面倒なりよきに計らえと皺しわが枯れたる御声にて云いたま
 わんは知れてあれど、恐る恐る円道ある時、思おぼさるる用途もちもやと
 伺いしに、塔を建てよとただ一言云われしぎり振り向きもしたま
 わず、鼈べつこうぶち甲縁めがねの大きなる眼鏡うちの中より微かすかなる眼の光りを放た
 れて、何の経やら論やらを黙々と読み続けられけるが、いよいよ

塔の建つに定まって例の源太に、積り書出せと円道が命令けしを、
 知つてか知らずにか上人様にお目通り願いたしと、のつそりが来
 しは今より二月ほど前なりし。

其五

紺とはいえど汗に褪め風に化りて異な色になりし上、幾たびか
 洗い濯がれたるためそれとしも見えず、襟の記印の字さえ臙げと
 なりし絆纏を着て、補綴のあたりし古股引をはきたる男の、
 髪は塵埃に塗れて白け、面は日に焼けて品格なき風采のなおさら
 品格なきが、うろうろのそのそと感応寺の大門を入りにかかるを、

門番とが尖り声で何者ぞと怪しみ誰ただ何せば、びっくりしてしばらく眼を見張り、ようやく腰を屈かがめて馬鹿丁寧に、大工の十兵衛と申しまする、御普請につきましたしてお願いに出ました、とおずおず云う風態そぶりの何となく腑ふには落ちねど、大工とあるに多方源太が弟子かなんぞの使いに來たりしものならんと推察すいして、通れと一言押おうへ柄いに許しける。

十兵衛これに力を得て、四方あたりを見廻めぐわしながら森こう嚴ごうしき玄関げん前にさしかかり、お頼たの申もうすと二三度いえば鼠ねずみ衣ころもの青黛せいたい頭ま、可愛かわゆらしき小坊主せうぼうしゅの、おおと答えて障子引き開あけしが、応接おうげつに慣れたるものの眼捷めばやく人を見て、敷台しきだいまでも下りず突つつ立ちながら、用事ようじなら庫裡くりの方かたへ廻めぐれ、と情つれなく云い捨てて障子しょうじぴつ

しやり、後はどこやらの樹頭きぎに啼なく鶉ひよの声ばかりして音もなく響きもなし。なるほどと独り言ひとごとしつつ十兵衛庫裡にまわりてまた案内を請えば、用人為右衛門仔細しさいらしき理屈顔して立ち出で、見なれぬ棟梁殿、いづくより何の用事で見えられた、と衣服みなりの粗末なるにはや侮りあなど軽しめた言葉遣いづか、十兵衛さらに気にもとめず、野わ生たくしは大工の十兵衛と申すもの、上人様の御眼にかかりお願いをいたしたいことのあつてまいりました、どうぞお取次ぎ下されまし、と首こうべを低くして頼み入るに、為右衛門じろりと十兵衛が垢あかく臭さき頭上あたまより白の鼻緒の鼠色になった草履はき居る足先まで睨ねめ下し、ならぬ、ならぬ、上人様は俗用にお関かかわりはなされぬわ、願ねがいというは何か知らねど云うて見よ、次第によりては我が取り

計ろうてやる、とさもさも万事心得た用人めかせる才物ぶり。それを無頓着むとんじやくの男の質ぶきよう朴へにも突き放して、いえ、ありがとうはござりますれど上人様に直じきじき々々でのうては、申しても役に立ちませぬこと、どうぞただお取次ぎを願います、と此方こちの心が醇いっぽ粹んぎなれば先方さきの氣きに触さわる言葉とも斟しん酌しやくせず推し返し言え、為右衛門腹には我を頼まぬが憎くて慍いりを含み、理わけのわからぬ男じやの、上人様は汝きさまごとき職人らに耳は仮かしたまわぬというに、取り次いでも無益むやくなれば我が計ろうて得させんと、甘く遇あえばつけ上る言い分、もはや何もかも聞いてやらぬ、帰れ帰れ、と小人の常態つねとて語氣つねたちまち粗暴あらくなり、膠にべなく言い捨て立たんとするにあわてし十兵衛、ではござりませうなれど、と半分いう間

なく、うるさい、喧しいと打ち消され、奥の方に入られてしもう
 て茫然と土間に突つ立つたまま掌の裏の螢に脱去られしごとき
 思いをなしけるが、是非なく声をあげてまた案内を乞うに、口あ
 る人のありやなしや薄寒き大寺の岑閑と、反響のみはわが耳に
 落ち来れど咳声一つ聞えず、玄関にまわりてまた頼むといえ、
 先刻見たる憎げな伶俐小僧のちよつと顔出して、庫裡へ行けと
 教えたるに、と独語きて早くも障子ぴしやり。

また庫裡に廻りまた玄関に行き、また玄関に行き庫裡に廻り、
 ついには遠慮を忘れて本堂にまで響く大声をあげ、頼む頼むお頼
 申すと叫べば、其声より大きな声を発して馬鹿めと罵りながら為右
 衛門ずかずかと立ち出で、僮僕どもこの狂漢を門外に引き出せ、

騒々しきを嫌いたまう上人様に知れなば、我らがこやつのために
 叱らるべしとの下知げじ、心得ましたと先刻さきより僕人部屋おとこべやに転ころがりい
 しおとこ寺僕おとこら立ちかかり引き出さんとする、土間に坐り込んで出いだされ
 じとする十兵衛。それ手を取れ足を持ち上げよと多おおせい勢口々に罵
 り騒ぐところへ、後園の花二枝にし三枝はさ剪んで床の眺めにせんと、境け
いだい内いだいあちこち逍しやうよう遙しやうようされし朗円上人、木蘭色もくらんじきの無垢むくを着て左
 の手に女郎花おみなえし桔梗きききよう梗、右の手に朱塗しゆの把にぎりの鋏はさみ持たせられしま
 ま、図らずここに來かかりたまひぬ。

其六

何事に罵り騒ぐぞ、と上人が下したまう鶴の一声のお言葉に群
 雀の輩鳴りを歇めて、振り上げし拳を蔵すに地なく、禅僧の問答
 にありやありやと云いかけしまま一喝されて腰の折けたるごとき
 風情なるもあり、捲り縮めたる袖を体裁悪げに下してこそこそと
 人の後ろに隠るるもあり。天を仰げる鼻の孔より火煙も噴くべき
 驕慢の怒りに意気昂ぶりし為右衛門も、少しは慚じてや首を
 たれ掌を揉みながら、自己が発頭人なるに是非なく、ありし次第
 をわが田に水引き水引き申し出づれば、痩せ皺びたる顔に深く長
 く痕いたる法令の皺溝をひとしお深めて、にったりと徐やかに笑
 いたまい、婦女のように軽く軟らかな声小さく、それならば騒が
 ずともよいこと、為右衛門汝がただ従順に取り次ぎさえすれば仔

細はのうてあろうものを、さあ十兵衛殿とやら老衲わしについて此方こち
 へおいで、とんだ気の毒な目に遇あわせました、と万人に尊敬うやまい慕
 わるる人はまた格別の心の行き方、未学を軽んぜず下司をも侮ら
 ず、親切に温ものやさ和ししく先に立つて静かに導きたまう後について、
 迂濶うかつな根性にも慈悲の浸み透れば感涙とどめあえぬ十兵衛、だん
 だんと赤土のしつとりとしたるところ、飛石の画趣えごころに布かれあ
 るところ、梧桐あおぎりの影深く四方竹の色ゆかしく茂れるところなど
 縈めぐり繞めぐり過ぎて、小やかなる折戸さざを入れば、花もこれというはな
 き小庭のただものさびで、有楽形うらくがたの燈籠とうろうに松の落葉の散りか
 かり、方星宿ほうせいしゆくの手水鉢ちようずばちに苔こけの蒸せるが見る眼ちりの塵をも洗う
 ばかりなり。

上人庭下駄脱ぎすてて上にあがり、さあ汝も此方へ、と云いさ
 して掌てに持たれし花を早速さそくに釣花つりはな活けに投げこまるるにぞ、十兵
 衛なかなか怯おめず臆おくせず、手てぬぐい拭いで足はたくほどのことも氣のつ
 かぬ男とてなすことなく、草履脱いでのつそりと三畳台目の茶室
 に入りこみ、鼻突き合わすまで上人に近づき坐りて黙々と一礼す
 る態さまは、礼儀ならに嫺なわねど充分いっわりに偽こころ飾まことなき情まことの眞実まことをあらわし、
 幾たびかすぐにも云い出でんとしてなお開きかぬる口をようやく
 に開きて、舌の動きもただどしく、五重の塔の、御願ごねんいに出ま
 したは五重の塔のためでござります、と藪やぶから棒を突き出したよ
 うに尻しりもつたてて声の調子も不揃ふぞろいに、辛くも胸にあることを額
 やら腋わきの下の汗とともに絞り出せば、上人おもわず笑いを催され、

何か知らねど老衲わしをば怖こわいものなぞと思わず、遠慮こころを忘れてゆるりと話をするがよい、庫裡くらの土間に坐り込こんで動かずにいた様子では、何か深う思い詰めて来たことであろう、さあ遠慮を捨てて急せかずに、老衲をば朋友ともだち同様におもつて話すがよい、とあくまで慈やさしき注こころ意ぞえ。十兵衛もろ脆もろくも梟ふくろと常々悪口受くる銅鈴眼すずまなこにはや涙を浮めて、はい、はい、はい、はい、ありがとうございます、思おもい詰めて参まい上ありました、その五重の塔を、こういう野郎でござります、御覧の通り、のっそり十兵衛と口惜くやしい譚名あだなをつけられて居やる奴やつでござります、しかしお上人様、真実ほんとでござります、工しごと事は下手ではござりませぬ、知っております私わたくしは馬鹿でござります、馬鹿にされております、意気地のない奴やつでござります、

虚誕うそはなかなか申しませぬ、お上人様、大工はできます、大隅おおすみ
 流りゆうは童児こどもの時から、後藤立川ごとうたてかわ二ツの流義も合点がてん致しておりま
 する、させて、五重塔の仕事を私にさせていただきたい、それで
 参上まいりました、川越の源太様が積りをしたとは五六日前聞きました
 た、それから私は寝ませぬわ、お上人様、五重塔は百年に一度一
 生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けております源太様
 の仕事を奪とりたくはおもいませぬが、ああ賢い人は羨ましい、一
 生一度百年一度の好い仕事を源太様はさるる、死んでも立派に名
 を残さるる、ああ羨ましい羨ましい、大工となって生きている生
 き甲斐ちがひもあらるるというもの、それに引き代えこの十兵衛は、鑿のみ
 手ちような斧もつては源太様にだとして誰にだとして、打つ墨縄の曲ること

はあれ万が一にも後れを取るようなことは必ず必ずないと思えど、
 年が年中長屋の羽目板はめの繕おれいやら馬小屋箱溝はこどぶの数仕事、天道様
 が知恵というものを我おれには賜くださらないゆえ仕方がないと諦あきらめて諦
 めても、拙ますい奴らが宮を作り堂を受け負い、見るものの眼から見
 れば建てさせた人が気の毒なほどのものを築造こしらえたを見るたびご
 とに、内々自分の不運を泣きますわ、お上人様、時々は口惜しく
 て技倆うでもない癖に知恵ばかり達者な奴が憎くもなりますわ、お
 上人様、源太様は羨ましい、知恵も達者なれば手腕うでも達者、ああ
 羨ましい仕事をなさるか、我おれはよ、源太様はよ、情ないこの我おれは
 よと、羨ましいがつかい高じて女房かかにも口きかず泣きながら寝まし
 たその夜のこと、五重塔きさまを汝おそ作れ今すぐつくれと怖おそろしい人にい

いつけられ、狼狽うろたえて飛び起きさまに道具箱へ手を突っ込んだは半分夢で半分現うつつ、眼が全く覚めて見ますれば指の先を鑢つばのみ鑿みにつっかけて怪我をしながら道具箱につかまって、いつの間にか夜具の中から出ていたつまらなさ、行燈あんどんの前につくねんと坐つてあ情ない、つまらないと思ひました時のその心持、お上人様、わかりまするか、ええ、わかりまするか、これだけが誰にでも分つてくれれば塔も建てなくてもよいのです、どうせ馬鹿なのつそり十兵衛は死んでもよいのでござりまする、腰拔鋸こしぬげのこのように生きていたくもないのですわ、其夜それからというものは真実ほんと、真実でござりまする上人様、晴れて居る空を見ても燈光あかりの達とどかぬ室へやの隅すみの暗いところを見ても、白木造りの五重の塔がぬつと突つ立つて私

を見下しておりますわ、とうとう自分が造りたい気になって、とても及ばぬとは知りながら毎日仕事を終るとすぐに夜を籠めて五十分一の雛形ひながたをつくり、昨夜ゆうべでちょうど仕上げました、見に来て下されお上人様、頼まれもせぬ仕事はできていた仕事はできない口惜しさ、ええ不運ほど情ないものはないと私がわしが歉あはげばお上人様、なまじできずば不運も知るまいと女房めが其雛形それをば揺り動かしての述懐、無理とは聞えぬだけによけい泣きました、お上人様お慈悲に今度の五重塔は私に建てさせて下され、拝みます、こここの通り、と両手を合わせて頭かしらを畳に、涙は塵を浮べたり。

其七

木彫りの羅漢らかんのように黙々と坐りて、菩提樹ぼだいじゆの實の珠数ずず繰りながら十兵衛じゆうべゑが埒らちなき述懐に耳を傾け居られし上人、十兵衛じゆうべゑが頭かしらを下ぐるを制しとどめて、わかりました、よく合点が行きました、ああ殊勝な心がけを持って居らるる、立派な考えを蓄たくわえていらるる、学徒どもの示しにもしたいような、老衲わしも思わず涙のこぼれました、五十分一の雛形とやらも是非見にまいりましょう、しかしそなた汝に感服したればとて今すぐに五重の塔しごの工事を汝に任するわと、軽かるはずみ忽ひとりぎめなことを老衲の独断ひとりぎめで言うわけにもならねば、これだけは明瞭はつきりとことわっておきまする、いずれ頼むとも頼まぬともそれは表立って、老衲からではなく感応寺から沙汰をしま

しよう、ともかくも幸い今日は閑暇ひまのあれば汝が作った雛形を見
たし、案内してこれよりすぐに汝が家へ老衲を連れて行てはくれ
ぬか、とすこしも辺よくだい幅を飾らぬ人の、義理すじみち明らかに言葉渋滞しぶり
なく云いたまえば、十兵衛満面に笑みを含みつつ米舂つくごとくむ
やみに頭を下げて、はい、はい、はいと答えおりしが、願いをお
取り上げ下されましたか、ああありがとうございます、野生わたくし
の宅うちへおいで下さりますると、ああもつたいたい、雛形はじきに
野生めが持つてまいりまする、御免下され、と云いさまさすがの
のっそりも喜悅に狂して平素つねには似ず、大げさに一つぽっくりと
礼をばするや否や、飛石に蹴けつまず躓すまきながら駈け出してわが家に帰
り、帰ったと一言女房にも云わず、いきなりに雛形持ち出して人

を頼み、二人して息せき急ぎ感応寺へと持ち込み、上人が前にさ
 し置きて帰りけるが、上人これを熟視よくみたまうに、初重より五重ま
 での配合つりあい、屋根庇廂ひさしの勾配こうばい、腰の高さ、椽木たるきの割賦わりふり、九
 輪うげばなろばんほうじゆ請花露盤宝珠みの体裁までどこに可厭いやなるところもなく、水
ずぎわ際立ずぎわつたる細工ぶり、これがあの不器用らしき男の手にてでき
 たるものかと疑たぐみわるるほど巧緻たくみなれば、独りひそかに歎じたま
 いて、かほどの技倆うでをもちながら空むなしく埋うずもれ、名を発せず世を
 経るものもあることか、傍眼わきめにさえも気の毒なるを当人の身となり
 てはいかに口惜くしきしきことならん、あわれかかるものに成るべきな
 らば功名てがらを得させて、多年いだ抱ける心願こころだのみに負そむかざらしめたし、
 草木とともに朽ちて行く人の身はもとより 因縁いんねん仮和合けわごう、よしや

惜しむとも惜しみて甲斐なく止めて止まらねど、たとえば木匠こだくみ
 の道は小なるにせよそれに一心の誠を委ね生命をかけて、欲も大あ
らまし概は忘れ卑劣きたな おもいき念も起さず、ただただ鑿のみをもつてはよく穿らん
 ことを思い、鉋かんなを持つてはよく削らんことを思う心の尊たつとさは金に
 も銀にも比たぐえがたきを、わずかに残す便宜よすがもなくていたずらに北ほ
くぼう郎うらの土に没うずめ、冥途よみじの苞つとと齎もたらし去らしめんこと思えば憫然あわれ至極
 なり、良馬りようめしゆう主を得ざるの悲しみ、高士かうし世に容いれられざるの恨み
 も詮せんずるところは異かわることなし、よしよし、我われ凶あやらずも十兵衛じゆうべゑが
 胸むねに懐いだける無価むかの宝珠ほうしゆの微光ゑいこうを認めしこそ縁ゆかりなれ、こたびの工しごと事
 を彼かれに命いのちけ、せめては少しの報酬むくいをば彼かれが誠実まことの心に得えさせんと
 思われけるが、ふと思ひよりたまえば川越かわごへの源太げんたもこの工しごと事をこ

とのほかに望める上、彼には本堂庫裏客殿作らせしちな因みもあり、しかも設計予算まではや做し出してわが眼に入れしも四五日前なり、手腕は彼とて鈍きにあらず、人の信用ははるかに十兵衛に超えたり。一ツの工事に二人の番匠、これにもさせたし彼にもさせたし、いずれにせんと上人もさすがこれには迷われける。

其八

明日辰の刻ごろまでに自身当寺へ来たるべし、かねてその方工事仰せつけられたきむね願いたる五重塔の儀につき、上人直接にお話示あるべきよしなれば、衣服等失礼なきよう心得て出頭せよ

と、おごそか嚴格に口上を演のぶるは弁舌自慢の円珍えんちんとて、唐辛子をむたしなぐと嗜み食くらえる崇たたり鼻さきの頭さきにあらわれたる滑稽納所おどけなつしよ。平日ふだんならば南蛮なんぼん和尚といえる諱名あだなを呼びて戯談じようだんぐち口くきき合うべき間なれど、本堂建立中朝ちようせき夕顔を見しよりおのずと狎なれし馴染なじみも今は薄くなりたる上、使僧らしゆう威儀をつくろいて、人さし指中指の二本でややもすれば兜背形とつばいなりの頭顱あたまの頂てっぺん上かを搔かく癖ある手をも法衣ころもの袖そでに殊勝かくくさく隠蔽かくし居るに、源太も敬うやまつつしい謹んで承知の旨を頭下げつつ答えけるが、如才なきお吉はわが夫をかかずくにゆう俗僧にまでよく評いわせんとか帰り際に、出したままに行いく茶菓子とともに幾いく干銭くらか包み込み、是非にというて取らせけるは、思えばけしからぬ布施のしようなり。円珍十兵衛が家にも

詣りて同じことを演べ帰りけるが、さてその翌日となれば源太は
ひげそ鬚剃り月代さかやきして衣服をあらため、今日こそは上人のみずから我
 に御用仰せつけらるるなるべけれど勢い込んで、庫裏より通り、
 とある一間に待たされて坐を正しくし扣えける。

さま態こそ異れかわ十兵衛も心は同じ張りをもち、導かるるまま打ち通
 りて、人気のなきに寒さ湧く一室の中にただ一人兀然として、
 今や上人の招よびたまうか、五重の塔の工事一切汝そなたに任すと命令た
 まうか、もしまた我には命じたまわず源太に任すと定めたまひし
 を我にことわるため招よばれしか、そうにもあらば何とせん、浮む
 よしなき埋れ木のわが身の末に花咲かん頼みも永くなくなるべし、
 ただ願わくは上人のわが愚かしきを憐あわれみて我に命令たまわんこ

とをと、九尺二枚の唐襖からかみに金鳳銀鳳きんほうぎんおう翔り舞うその箔模はく様の
 美しきも眼に止めずして、茫々ぼうぼうと暗路やみじに物を探るさぐごとく念想おもひを
 空に漂わすことやや久しきところへ、例の伶俐りこうげな小僧こぼうずいで来
 たりて、方丈さまの召しますほどにこちらへおいでなされまし、
 と先に立つて案内すれば、すわや願望のぞみのかなうともかなわざると
 も定まる時ぞと魯鈍おろかの男も胸を騒がせ、導ひかるるまま随まいて一室ひとま
 の中うちへずつと入る、途端にらにこなたをぎろりつと見る眼鏡めがねく怒りを
 含んで斜にらめに睨にらむは思いがけなき源太にて、座に上人の影もなし。
 事の意外に十兵衛も足踏みとめて突つ立つたるまま一言もなく白に
 眼らみ合あいしが、是非なく畳二ひらばかりを隔へてしところにようやく
 坐り、力なげ首し梢おし然おのと己ひれが膝ざに氣いき勢おのなきたそうなる眼を

注ぎ居るに引き替え、源太郎は小狗を瞰下す猛鷲の風に臨んで千尺の巖の上に立つ風情、腹に十分の強みを抱きて、背をも屈げねば肩をも歪めず、すつきり端然と構えたる風姿といい面貌といひ水際立つたる男振り、万人が万人とも好かずには居られまじき天晴れ小気味のよき好漢なり。

されども世俗の見解には堕ちぬ心の明鏡に照らしてかれこれにもに愛し、表面の美醜に露泥まれざる上人のかえつていずれをとも昨日までは扱びかねられしが、思いつかることのありてか今日はわざわざ二人を招び出されて一室に待たせおかれしが、今しも静々居間を出でられ、畳踏まるる足も軽く、先に立つたる小僧が襖明くる後より、すつと入りて座につきたまえば、二人は恭い

敬つつしみてともにひと齊ひとしく頭こうべを下げげ、しばらく上げも得えせざりしが、あ
 あいじらしや十兵衛が辛あつくも上げし面おもてには、まだ世馴よぢれざる里さとの
 子の貴人きにんの前まへに出いでしように羞はじを含こみて紅潮くれないし、額ぬかの皺しわの幾いくすじ条じょう
 の溝みぞには沁出にじみし熱汗あせを湛たえ、鼻はなの頭さきにも珠たまを湧わかせば腋わきの下したには
 雨あめなるべし。膝ひざにおきたる骨太こつたの掌指ゆびは枯かれたる松まつが枝えだごとき岩いわ
 畳たたみ作つくりにありながら、一本いっぴんごとにそれさえもわなわな顫ふるえて一心いっしん
 にただ上人じゆんじんの一言いちごんを一期いちきの大事だいじと待まちつ笑止わらひどき。

源太げんたも黙もくして言葉ことばなく耳みみを澄すまして命いのちを待まちつ、どちらをどちら
 と判わけかぬる、二人ふたりの情こころを汲くみみて知る上人じゆんじんもまたなかなか口くちを
 開ひらかん便宜よすがなく、しばしは静しずまりかえられしが、源太げんた十兵衛じゆうべゑとも
 に聞きけ、今度こんど建たつべき五重塔ごじゆうたはただ一いちツにて建たてんというは汝そなたた

ち二人、二人の願いを双方とも聞き届けてはやりたけれど、それはもとよりかないがたく、一人に任さば一人の歎き、誰に定めて命いいつけんという標きめどころ準のあるではなし、役僧用人らの分別にも及ばねば老僧わしが分別にも及ばぬほどに、この分別は汝たちの相談に任す、老僧は関かまわぬ、汝たちの相談の纏まとまりたる通り取り上げてやるべければ、よく家に帰つて相談して来よ、老僧が云うべきことはこれぎりじやによつてそう心得て帰るがよいぞ、さあしかと云い渡したぞ、もはや帰つてもよい、しかし今日は老僧も閑暇ひまで退屈なれば茶話しの相手になつてしばらくいてくれ、浮世の噂など老衲わしに聞かせてくれぬか、その代り老僧も古い話しのおかしなを二ツ三ツ昨日見出したを話して聞かそう、と笑顔やさしく、

ともだち
朋友かなんぞのように二人をあしろうて、さて何事を云い出さ
るるやら。

其九

こぼうず
小僧がもつて来し茶を上人みずから汲みたまいてすすめらる
れば、二人とももつたいながりて恐れ入りながら頂戴するを、そ
う遠慮されては言葉に角が取れいで話が丸う行かぬわ、さあ菓子
はさ
も挟んではやらぬから勝手に摘んでくれ、と高たか坏つぎ推しやりてみ
ずからも天目取り上げ喉のどを湿うるしたまい、面白い話おというも 桑よす
門との老僧わしらにはそうたくさんないものながら、このごろ読んだ

お経の中うちにつくづくなるほどと感心したことのある、聞いてくれ
 こういふ話しじや、むかしある国の長者が二人の子を引きつれて
 うらかな天気おりの節かおに、香りのする花の咲き軟らかな草しげの滋しげつて
 居ひろのる広野たのしを愉快ゆぎようげに遊ゆぎよう行したところ、水は大分に夏の初めゆえ
 涸かれたれどなお清らかに流れて岸を洗うて居る大きな川に出で逢
 うた、その川の中には珠こいしのような小磧こいしやら銀こいしのような砂こいしでできて
 居る美しい洲すのあつたれば、長者は興ひとひろに乗じて一尋ひとひろばかりの流
 れを無造作に飛び越え、あなたこなたを見廻せば、洲うしろの後面うしろの方
 もまた一尋ほどの流れて陸おかと隔てられたる別世界、まるで浮世ひとの
 なまぐさい土地つちとは懸かけはな絶なれた清しやうじやう淨じやうの地であつたまま独ひとり飲
 び喜んで踊躍ゆやくしたが、渉わたろうとしても渉り得ない二人の児童こどもが羨

ましがって喚び叫ぶを可憐に思い、汝たちには来ることのできぬ
 清浄の地であるが、さほどに来たくば渡らしてやるほどに待つて
 いよ、見よ見よわが足下のこの磧は一々蓮華の形状をなし居る
 世に珍しき磧なり、わが眼の前のこの砂は一々五金の光をもてる
 比類まれなる砂なるぞと説き示せば、二人は遠眼にそれを見てい
 よいよ焦躁り渡ろうとするを、長者は徐かに制しながら、洪水
 の時にても根こぎになつたるらしき棕櫚の樹の一尋余りなを架け
 渡して橋としてやつたに、我が先へ汝は後にと兄弟争い闘いだ末、
 兄は兄だけ力強く弟をついに投げ伏せて我意の勝を得たに誇り高
 ぶり、急ぎその橋を渡りかけ半途にようやく到りし時、弟は起き
 上りさま口惜しさに力を籠めて橋をうごかせば兄はたちまち水に

落ち、苦しみもが腕うでいて洲に達せしが、この時弟ははやその橋を難な
 く渡り超えかくるを見るより兄もその橋の端を一揺り揺り動かせ
 ば、もとより丸木の橋なるゆえ弟も堪たまらず水に落ち、わずかに長
 者の立つたるところへ濡ぬれ滴したたりて這はい上った、その時長者は歎息
 して、汝たちには何と見ゆる、今汝らが足踏みかけしよりこの洲
 はたちまち前と異なり、磧は黒く醜すなくなり沙は黄ばめる普通つねの沙
 となれり、見よ見よいかにと告げ知らするに二人は驚き、眼まなこを睜みは
 りて見れば全く父の言葉に少しも違たがわぬ沙磧すないし、ああかかるもの取
 らんとて可愛き弟を悩ませしか、尊たつとき兄を溺おぼらせしかと兄弟とも
 に慚はじ悲しみて、弟たもとの袂たもとを兄は絞もすそり兄の衣裾もすそを弟は絞もすそりて互あひいに
 いたわり慰めけるが、かの橋をまた引き来たりて洲うしろの後面うしろなる流

れに打ちかけ、はやこの洲には用なければなおもあなたに遊び歩
 かん、汝たちまずこれを渡れと、長者の言葉に兄弟は顔を見合
 て先刻さきには似ず、兄上先にお渡りなされ、弟よ先に渡るがよいと
 譲り合いしが、年順なれば兄まず渡るその時に、転まろびやすきを氣
 遣いて弟は端を揺がぬようしかと抑おさゆる、その次に弟渡れば兄も
 また揺がぬように抑えやり、長者は苦なく飛び越えて、三人とも
 にいと長閑のどけくそぞろに歩むそのうちに、兄が図らず拾いし石を弟
 が見れば美しき蓮華の形をなせる石、弟が摘つまみ上げたる砂を兄が
 覗のぞけば眼も眩まばゆく五金の光を放ちていたるに、兄弟ともども歡喜よろこび
 樂しみ、互いに得たる幸福しあわせを互いに深く讚歎し合う、その時長
 者は懷中ふところより真実まことの壁たまの蓮華を取り出し兄に与えて、弟にも真

実の砂金を袖より出して大切だいじにせよと与えたという、話してしまえば小供欺だましのようじゃが仏説ぶつせつに虚言うそはない、小児欺せうじしでは決してない、噛みしめて見よ味のある話ではないか、どうじゃ汝たちにも面白いか、老僧には大層面白いが、と軽く云われて深く浸む、譬喩ひゆ方便も御胸ごちゆうの中にもたるる真実まことから。源太十兵衛二人とも顔見合わせて茫然たり。

其十

感応寺よりの帰り道、半分は死んだようになって十兵衛、どんつく布子の袖組み合わせ、腕拱こまぬきつつうかうか歩き、お上人様の

ああおつしやつたはどちらか一方おとなしく譲れと諭しさとの謎々なぞなぞ
 とは、何ほど愚鈍おろかな我おれにも知れたが、ああ譲りたくないものじゃ、
 せつかく丹誠に丹誠凝らして、定めし冷えて寒かろうにお寝やすみな
 されと親切でしてくるる女房かかの世話までを、黙つていよよけいな
 と叱り飛ばして夜の眼も合わさず、工夫に工夫を積み重ね、今度
 という今度は一世一代、腕一杯の物を建てたら死んでも恨みはな
 いとまで思い込んだに、悲しや上人様の今日のお諭さとし、道理には
 違いないそうもなければならぬことじゃが、これを譲つていつま
 た五重塔の建つという的あてのあるではなし、一生とてもこの十兵衛
 は世に出ることのならぬ身か、ああ情ない恨めしい、天道様が恨
 めしい、尊たつとい上人様のお慈悲は充分わかつていて露ばかりもあり

がとうなくは思わぬが、ああどうにもこうにもならぬことじゃ、
相手は恩のある源太親方、それに恨みの向けようもなし、どうし
てもこうしても温順すなおに此方こちの身を退ひくよりほかに思案も何もな
いか、あはないか、というて今さら残念な、なまじこのようなこと
おもいたたずに、のっそりだけで済ましていたらばこのように残
念おもいな苦惱おもいもすまいものを、分際忘れた我おれが悪かつた、ああ我が悪
い、我が悪い、けれども、ええ、けれども、ええ、思うまい思う
まい、十兵衛がのっそりで浮世の伶俐りこうな人たちの物笑いになつて
しまえばそれで済むのじゃ、連れ添かう女房かにまでも内々はたらき活用の
利かぬ夫じやと啣かこたれながら、夢のように生きて夢のように死ん
でしまえばそれで済むこと、あきらめて見れば情ない、つくづく

世間がつまらない、あんまり世間が酷過ぎる、と思うのもやっぱり愚痴か、愚痴か知らねど情な過ぎるが、言わず語らず諭された上人様のあの言葉の眞実まことのところを味わえば、あくまでお慈悲の深いのが五臓六腑に浸み透つて未練な愚痴の出端もないわけ、争う二人をどちらにも傷つかぬよう捌さばきたまい、末の末までもによかれと兄弟の子に事寄せて尙とうといお経を解きほぐして、噛かんで含めて下さったあのお話に比べて見ればもとより我は弟の身おとと、ひとしお他に譲ひとらねば人間らしくもないものになる、ああ弟とは辛いものじやと、路みちも見分かで屈托まなこの眼は涙に曇りつつ、とぼとぼとして何一ツ愉快たのしみもなきわが家の方に、糸で曳ひかるる木偶でくのように我を忘れて行く途中、この馬鹿野郎癡狂漢きちがいめ、我ひとのせつかく洗

つたものに何する、馬鹿めとだしぬけに噛みつくごとく罵られ、
かんばりごえ癩張声に胆を冷やしてハツと思えばぐわらり顛倒、手桶枕に
 立てかけありし張物板に、我知らず一足二足踏みかけて踏み覆し
ざまのなたる不体裁さ。

しりもち尻餅ついて驚くところを、狐憑きめ忌々しい、と駄力
 ばかりは近江のお兼、顔は子供の福笑戯に眼をつけ歪めた多福
め面のごとき房州出らしき下婢の憤怒、拳を挙げて丁と打ち猿臂を
 伸ばして突き飛ばせば、十兵衛堪らず汚塵に塗れ、はいはい、狐
つまに誑まれました御免なされ、と云いながら悪口雑言聞き捨てに痛
 さを忍びて逃げ走り、ようやくわが家に帰りつけば、おおお帰り
 か、遅いのでどういふことかと案じていました、まあ塵埃まぶれ

になつてどうなされました、と払いにかかるを、構うなど一言、
 気のなさそうな声で打ち消す。その顔を覗き込む女房にようぼの眞実心配
 そうなを見て、何か知らず無性に悲しくなつてじつと湿うるみのさし
 くる眼まなこ、自分で自分を叱るように、ええと囁ささらず声を出し、煙草
 を捻ひねつて何気なくもてなすことはもてなすものの言葉もなし。平つ
 時ねに変わる状態ありさまを大方それと推察すいしてさて慰むる便すべもなく、問
 うてよきやら問わぬがよきやら心にかかる今日の首尾をも、口
 は出して尋ね得ぬ女房は胸を痛めつつ、その一本は杉すぎ箸ばしで辛く
 も用を足す火箸に挟んで添える消炭の、あわれ甲斐なき火力ちからを頼
 り土瓶どびんの茶をば温ぬくむるところへ、遊びに出たる猪之の戻りて、や
 あ父様帰つて来たな、父様も建てるか坊も建てたぞ、これ見てく

れ、とさも勇ましく障子を明けて褒められたさが一杯に罪なくに
 こりと笑いながら、指さし示す塔の模^{まね}形^{かた}。母は襦^{じゆ}袷^{ぼん}の袖を嚙
 み声も得たてず泣き出せば、十兵衛涙に浮くばかりの円^{つぶらまなこ}の眼^こを剥
 き出^{いだ}し、まじろぎもせでぐいと睨^ねめしが、おおでかしたでかした、
 よくできた、褒^{ほう}美^びをやろう、ハツハハハと咽^{むせ}び笑いの声高く屋の
 棟^{むね}にまで響かせしが、そのまま頭^{こうべ}を天^{あま}に対^{むか}わし、ああ、弟とは辛
 いなあ。

其十一

格子開^{こうし}くる響^さき爽^{さわ}やかなること常のごとく、お吉、今帰った、

と元氣よげに上り来たる夫の声を聞くより、心配を輪に吹き吹き
 吸うていし煙草管きせるを邪見至極ほうに抛り出して忙わしく立ち迎え、大
 層遅かつたではないか、と云いつつ背面うしろへ廻つて羽織を脱がせ、
 立ちながら腮あごに手伝わせての袖畳み小早く室隅すみの方にそのままさ
 し置き、火鉢そぼの傍へすぐまた戻つてたちまち鉄瓶てつびんに松虫ねの音を発おこ
 させ、むずと大胡坐おおあぐらかき込み居る男の顔をちよつと見しなに、
 日は暖かでも風が冷たく途中は随分寒ひえましたろ、一瓶ひとつ煖酒つけましょ
 か、と痒かゆいところへよく届かす手は口をきくその間ひまに、がたびし
 させず膳ぜんごしらえ、三輪漬は柚ゆの香ゆかしく、大根おろし卸で食わする
 鮭卵はらわいは無造作にして気が利きたり。

源太胸には苦慮おもいあれども幾らかこれに慰められて、猪口ちよくと把りさ

まに二三杯、後一杯を漫く飲んで、汝も飲れと与うれば、お吉一口、つけて、置き、焼きかけの海苔のり畳み折つて、追つつけ三子の来きそうなもの、と魚屋の名を独り語ひとごとしつ、猪口を返して酌しやくせし後、上々吉と腹に思えば動かす舌も滑なめらかに、それはそうと今日の首尾は、大丈夫此方こちのものとは極きめていても、知らせて下さらぬうちは無益むだな苦勞を妾わたしはします、お上人様は何と仰せか、またのっそりめはどうなったか、そう真面目顔でむつつりとして居られては心配で心配でなりません、と云われて源太は高笑い。案じてもらうことはない、お慈悲の深い上人様はどの道我われを好漢いとおとこにして下さるのよ、ハハハ、なあお吉、弟を可愛がればいい兄きではないか、腹の饑へつたものには自分が少しは辛くても飯を分けてやらね

ばならぬ場合もある、他の怖いことは一厘ないが強いばかりが男
とこ児ではないなあ、ハハハ、じつと堪忍がまんして無理に弱くなるのも男
 児だ、ああ立派な男児だ、五重塔は名譽の工事しごと、ただ我われ一人でも
 のの見事に千年壊れぬ名物を万人の眼に残したいが、他の手も知
 恵も寸分交ぜず川越こわの源太が手腕うでだけで遺のこしたいが、ああ癩かんしゃ
く癩を堪忍するのが、ええ、男児だ、男児だ、なるほどいい男児
 だ、上人様に虚言うそはない、せっかく望みをかけた工事を半分他に
 くれるのはつくづく忌々いまいましけれど、ああ、辛いが、ええ兄きだ、
 ハハハ、お吉、我はのっそりに半口やって二人で塔を建てようと
 おもうわ、立派な弱い男児か、賞ほめてくれ賞めてくれ、汝きさまにでも
 賞めてもらわなくてはあまり張合いのない話だ、ハハハと嬉し

そうな顔もせで意味のない声ばかりはずませて笑えば、お吉は夫
 の気を量りかね、上人様が何とおっしゃったか知らぬが妾にはさ
 つぱり分らずちつとも面白くない話し、唐偏朴のあののつそり
 めに半口やるとはどういうわけ、日ごろの気性にも似合わない、
 やるものならば未練気なしにすっかりやってしまふが好いし、も
 とより此方で取るはずなれば要りもせぬ助太刀頼んで、一人の首
 を二人で切るような卑劣なことをするにも当らないではありませ
 ぬか、冷水で洗ったような清潔な腹をもつて居ると他にも云わ
 れ自分でも常々云うていた汝が、今日に限って何という煮えきれ
 ない分別、女の妾から見ても意地の足らないぐずぐず思案、賞め
 ませぬ賞めませぬ、どうしてなかなか賞められませぬ、高が相手

は此方こちの恩を受けて居るのつそりめ、一体ならば此方こちの仕事を先さ
きくぐ潜りする太い奴と高飛車に叱りつけて、ぐうの音も出させぬよ
 うにすればなるのつそりめを、そう甘やかして胸の焼ける連れんみよ名
うしごと工事をなんでするに当るはずのあろうぞ、甘いばかりが立派の
 ことか、弱いばかりが好い男児か、妾の虫には受け取れませぬ、
 なんなら妾が一走りのつそりめのところに行つて、重々恐れ入り
 ましたと思ひ切らせて謝罪あやまらせて両手を突かせて来ましようか、
 と女賢さかしき夫思ひ。源太は聞いて冷笑あざわらい、何が汝にわかるもの
 か、我のすることを好いとおもっていてさえくるればそれでよい
 のよ。

其十二

色も香もなく一言に黙つていよとやり込められて、聴かぬ氣のお吉顔ふり上げ何か云い出したげなりしが、自己よりは一倍きかぬ氣の夫の制するものを、押し返して何ほど云うとも機嫌を損ずることこそはあれ、口答えの甲斐は露なきを経験あつて知り居れば、連れ添うものに心の奥を語り明かして相談かけざる夫を恨めしくはおもいながら、そこは怜悧の女の分別早く、何も妾が遮つて女の癖に要らざる嘴を出すではなけれど、つい氣にかかる仕事の話しゆえ思わず様子の聞きたくて、よけいなことも胸の狭いだけに饒舌つたわけ、と自分が眞実籠めし言葉をわざとごくごく軽

うしてしもうて、どこまでも夫の分別に従うよう表面を粧うも、
 幾らか夫の腹の底にあるもしゃくしや煩悶を殺いでやりたさよりの真実。
 源太もこれに角張りかかった顔をやわらげ、何ごとも皆まわりあわせ天運
 じゃ、此方の了見さえ温順すなお やさに和しくもつていたならまた好いこと
 の廻つて来ようと、こうおもつて見ればのつそりに半口やるもか
 えつて好い心持、世間は氣次第で忌々しくも面白くもなるもの
 ゆえ、できるだけは卑劣けち さびな鑪を根性に着けず瀟洒あつさりと世を奇麗に
 渡りさえすればそれで好いわ、と云いさしてぐいと仰飲あおぎ、後は
 芝居の噂やら弟子どもが行状みもちの噂、真に罪なき雑話を下物さかなに酒も
 過ぎぬほど心よく飲んで、下卑げびた体裁さまではあれどとり膳睦むつまじく
 飯を喫おわ了り、多おおかた方もう十兵衛が来そうなものど何事もせず待ち

かくるに、時は空しく経過て障子の日ひかげ 一尺動けどな見ええず、
二尺も移れどな見ええず。

是非先方むこうより頭かしらを低くし身を縮めてすぼ此方こちへ相談に來たり、何とぞ半分なりと仕事をわけて下されと、今日の上人様のお慈愛なげ深きお言葉を頼りに泣きついても頼みをかけべきに、何としてこうは遅きや、思いあきらめて望みを捨て、もはや相談にも及ばずとて独りわが家にくすほ燻り居るか、それともまた此方より行くを待つて居るか、もしも此方の行くを待つて居るといふことならばあまり増長した見なれど、まさかにそのような高慢いだ気も出すまじ、例のつそりで悠ゆうちよう長ちように構えて居るだけのことならんが、さても気の長い男め迂濶うかつにもほどのあれと、煙草ばかりいたずらに喫ふかし

いて、待つには短き日も随分長かりしに、それさえ暮れてむらから群むら
 烏すねぐら罫ぐらに帰るころとなれば、さすがに心おもしろからずようやく
 癩癩こらの起り起りて耐えきれずなりし潮先、据すえられし晩ゆうめし食めしの膳
 に対むかうとそのまま云いわけばかりに箸をつけて茶さえゆるりとは
 飲のまず、お吉、十兵衛めがところころにちよつと行て来る、行違ちがいに
 なつて不在るすへ来こば待たしておけ、と云う言葉さえとげとげしく怒
 りを含んで立ち出でかかれれば、気にはかかれど何とせん方もなく、
 女房は送つて出したる後にて、ただ溜ためい息いきをするのみなり。

其十三

涉あつて開あきかぬる雨戸あまにひとしお源太たかぶは癩癩たかぶの火の手たかぶを亢たかぶらせ
 つつ、力ちからまかせにがちがち引き退のけ、十兵衛家うちにか、と云いさま
 につとはいれば、声こわいろ色知こわいろつたるお浪なみ早くもそれと悟さとつて、恩あ
 るその人の敵むこうに今は立ち居る十兵衛じゅうべゑに連れ添そえる身の面おもてを対あすこ
 と辛からく、女氣かよわの纖弱かよわくも胸むねをどきつかせながら、まあ親方様おやぢさま、と
 ただ一言我知らず云い出したるぎり挨あひさつ拶あひさつさえどぎまぎして急に
 は二の句の出でぎるうち、煤すすけし紙かみに針はりの孔あな、油あぶら染ぞめみなんど多あき行あ
んどん 燈あかりの小蔭こかげに悄然しんげんと坐り込める十兵衛じゅうべゑを見かけて源太げんたにずっと通あ
 られ、あわてて火鉢ひばちの前に請しょうずる機転ますきの遅鈍おそも、正直まことばかりで世よ
 態のを知し悉みこまぬ姿すがたなるべし。

十兵衛じゅうべゑは不ふ束つつかに一礼いちれいして重おもげに口くちを開あき、明日あしたの朝あさ参まゐらう

とおもっております、といえはじろりとその顔下眼にらに睨み、わざと泰然おちつきたる源太、おお、そういう其方そちのつもりであつたか、こつちは例の氣短ゆえ今しがたまで待つていたが、いつになつて汝そなたの来るか知れたことではないとして出かけて来ただけ馬鹿であつたか、ハハハ、しかし十兵衛、汝は今日の上人様のあのお言葉をなんと聞いたか、兩人ふたりでよくよく相談して来よと云われた揚句に長者の二人の児のお話し、それでわざわざ相談に来たが汝も大抵分別はもう定きめて居るであらう、我われも随分虫持ちだが悟つて見ればあの譬諭たとえの通り、尖とがりあうのは互いにつまらぬこと、まんざら敵かたき同士でもないに身勝手ばかりは我も云わぬ、つまりは和熟くだした決けつじよう定のところが欲しいゆえに、我欲は充分折つて摧くだいて思

案を凝らして来たものの、なお汝の了見も腹蔵のないところを聞きたく、その上にまたどうともしようと、我も男児なりや汚い謀計くみを腹には持たぬ、真実ほんとにこうおもうて来たわ、と言葉をしばしとどめて十兵衛が顔を見るに、俯伏うつむいたままだはい、はいと答うるのみにて、乱鬢らんびんの中に五六本の白髪しらが瞬またたく燈火あかりの光を受けてちらりちらりで見ゆるばかり。お浪ははや寝し猪いの助すけが枕の方さびについて坐つて、呼吸いきさえせぬようこれもまた静まりかえり居る淋しさびさ。かえつて遠くに売りあるく鍋焼饅頭うどんの呼び声かすの、幽そかに外と方ちより家やの中うちに浸ひみこみ来たるほどなりけり。

源太はいよいよ気を静め、語気なだらかに説いき出だすは、まあ遠慮みえもなく外見みえもつくらず我の方から打ち明けようが、なんと十兵

衛こうしてはくれぬか、せつかく汝も望みをかけ天晴あつぱれ名誉の仕
 事をして持ったる腕の光をあらわし、欲徳ではない職人の本望を
 見事に遂げて、末代に十兵衛という男が意おもいつき匠おもいつきぶり細工ぶりこ
 れ視みて知れと残そうつもりであろうが、察しもつこう我とてもそ
 れは同じこと、さらにあるべき普請ではなし、取り外はぐつては一生
 にまた出逢うことはおぼつかないなれば、源太は源太で我が意匠
 ぶり細工ぶりを是非遺のこしたいは、理屈を自分のためにつけて云え
 ば我はまあ感応寺の出入り、汝はなんの縁ゆかりもないなり、我は先口、
 汝は後なり、我は頼まれて設計つもりまでしたに汝は頼まれはせず、他ひと
 の口から云うたらばまた我は受け負うても相応、汝が身柄がらでは不
 相応と誰しも難をするであろう、だとして我が今理屈を味方にする

でもない、世間を味方にするでもない、汝が手腕うでのありながら不幸せで居るといふも知つて居る、汝が平素ふだん薄ふしあわせ命めいを口へこそ出さね、腹の底ではどのくらい泣いて居るといふも知つて居る、我を汝の身にしては堪忍がまんのできぬほど悲しい一生といふも知つて居る、それゆゑにこそ去年一昨年おとしなんにもならぬことではあるが、まあできるだけの世話はしたつもり、しかし恩に被きせるとおもうてくれるな、上人様だとして汝の清潔きれいな腹の中をお洞みとおし察さつになつたればこそ、汝の薄ふしあわせ命めいを氣の毒とおもわれたればこそ今日のようなお諭し、我も汝が欲かなんぞで対岸むこうにまわる奴ならば、我のひと仕事に邪魔を入れる猪口ちよこざい才さいな死節野郎しにぶしやろうと一ひとち斬やうなに脳天打ぶつ欠くかずにはおかぬが、つくづく汝の身を察すればいっそ仕事もく

れたいような気のするほど、というて我も欲は捨て断れぬ、仕事は眞実どうあつてもしたいわ、そこで十兵衛、聞いてももらいにくく云うても退けにくい相談じやが、まあこうじや、堪忍して承知してくれ、五重塔は二人で建ちよう、我を主にして汝不足でもあろうが副になつて力を仮してはくれまいか、不足ではあろうが、まあ厭でもあろうが源太が頼む、聴いてはくれまいか、頼む頼む、頼むのじや、黙つて居るのは聴いてくれぬか、お浪さんも我の云うことのわかつたならどうぞ口を副えて聴いてもらつては下さらぬか、と脆くも涙になりいる女房にまで頼めば、お、お、親方様、ええありがとうございます、どこにこのような御親切の相談かけて下さる方のまたあろうか、なぜお礼をば云われぬか、と左の

袖は露つゆしぐれ時雨、涙に重くなしながら、夫の膝を右の手で揺り動か
 しつ掻かき口説くどけど、先刻さきより無言の仏となりし十兵衛何ともなお
 言わず、再ふたたび度三度かきくどけど黙むつきり黙としてなお言わざりしが、
 やがて垂たれたる首を抬こげ、どうも十兵衛それは厭でござりまする、
 と無愛想に放はなつ一言、吐胸とむねをついて驚く女房。なんと、と一声烈はげ
 しく鋭く、頸くび首反ぼねらす一二寸、眼に角たててのっそりをまつ向
 よりして瞰みおろ下す源太。

其十四

人情の花も失なくさざず義理の幹もしつかり立てて、普な通みのものに

はできざるべき親切の相談を、一方ならぬ実意じつのあればこそ源太のかけてくれしに、いかに伐きつて抛なげ出したような性質もちまえがさする返答なればとて、十兵衛厭あでござりまするとはあまりなる挨拶あいさ、他の情愛ひと なさけのまるでわからぬ土人形でもこうは云うまじきを、さりとは恨めしいほど没義道もぎどうな、口惜しいほど無分別な、どうすればそのように無茶なる夫の了見と、お浪は呆あきれもし驚きもしわが身の急に絞木しめぎにかけて絞めらるるごとき心地のして、思わず知らず夫にすり寄り、それはまあなんとということ、親方様があれほどにあなたをあなたのためを計つて、見るかげもないこの方連れ、云わば一足に蹴落しておしまいなさることもなさらばできるこの方連れに、大抵ではないお情をかけて下され、御自分一人でな

ざりたい仕事をも分けてやろう半口乗せてくりようと、身に浸み
 るほどありがたい御親切の御相談、しかもお招喚よびつけにでもなつて
 でのことか、坐蒲団ざぶとんさえあげることのならぬこのようなところへ
 わざわざおいでになつてのお話し、それを無にしてもつたいたい、
 十兵衛厭でござりまするとは冥利みょうりの尽きた我儘わがまま勝手、親方様
 の御親切の分らぬはずはなからうに胴欲どうよくなも無遠慮むゑんりょなも大方程ほどあ
 度いのあつたもの、これこの妾わたしの今いま着て居るのも去年の冬の取り
 つきに袷あわせすがた姿おまえの寒さむげなを氣きの毒どくがられてお吉様の、縫直なほして着
 よと下されたのとは汝おまえの眼まなこには暎うつつらぬか、一方ならぬ御恩を受け
 ていながら親方様の対岸むこうへ廻まわるさえあるに、それを小癩こしやくなども
 恩知らずなどもおつしやらず、どこまでも弱い者を愛護かほうて下さ

るお仁慈なまじけ深い御分別にも頼より縋すがらいで一概に厭じやとは、たとえ
 ば真底から厭にせよ記ものおぼえ臆のある人間ひとの口から出せた言葉でご
 ざりまするか、親方様の手前お吉様の所おもわく思をもよくとつくりと
 考えて見て下され、妾はもはやこれから先どの顔さげてあつかま
 しくお吉様のお眼にかかることとなるものぞ、親方様はお胸の広
 うて、ああ十兵衛夫婦はわけの分らぬ愚か者なりや是も非もない
 と、そのまま何とも思おぼしめされずただ打ち捨てて下さるか知らね
 ど、世間は汝を何と云おう、恩知らずめ義理知らずめ、人情解げせ
 ぬ畜生め、あれ奴めは犬じゃ烏じやと万人の指甲つめに弾はじかれものとな
 るは必ひつじよう定、犬や烏と身をなして仕事をしたとて何の功名てがら、欲
 をかわくな齷あくせく齷するなど常々妾に諭さとされた自分の言葉に対して

も恥かしゆうはおもわれぬか、どうぞ柔順すなおに親方様の御異見につ
 いて下さりませ、天そびに聳ゆる生雲しやううんとう塔とうは誰々二人で作つたと、
 親方様ともろともに肩を並べて世うたに称うたわるれば、汝の苦勞の甲斐
 も立ち親方様のありがたいお芳こころざし志こころざしも知るる道理、妾もどのよ
 うに嬉しかるか喜ばしかるか、もしそうなれば不足というは薬に
 したくもないはずなるに、汝は天魔てんまに魅みられてそれをまだまだ不
 足じゃとおもわるるのか、ああ情ない、妾が云わずと知れている
 汝自身の身のほどを、身の分際まげを忘れてか、と泣き声こゑになり搔ひき
 口くち説とすじく女房にようばの頭こゝろべは低く垂れて、鬚まげにさされし縫針ぬいの孔めどが啣くわえし一
 条とすじの糸いとゆらゆらと振ふうにも、千々に碎くだくる心の態さまの知しられてい
 とどいじらしきに、眼まなこを瞑ふさぎいし十兵衛じゆうべゑは、その時例ときれいの濁だみ声こゑ出

し、喧やかましいわお浪、黙もくつていよ、我われの話しの邪魔になる、親方様
聞いて下され。

其十五

思おもいの中に激うすればや、じたじたと慄ふるい出す膝ひざの頭かしらをしつかと
寄せ合あわせて、その上に両手突もろつ張り、身を固かくして十兵衛は、
情なさない親方様、二人でしようとは情なさない、十兵衛に半分仕事を譲
つて下さりようとはお慈悲あまのようで情なさない、厭いとでござります、厭
でござります、塔の建てたいは山々でももう十兵衛は断あきら念めてお
りまする、お上人様のお諭たましを聞いてからの帰り道すつぱり思おもい

あきらめました、身のほどにもない考えを持ったが間違い、ああ私が馬鹿でござりました、のっそりはどこまでものっそりで馬鹿にさえなつて居ればそれでよいわけ、溝どぶいた板いたでもたたいて一生を終りましょう、親方様堪かに忍にんして下され我わたしが悪い、塔を建ちようとはもう申しませぬ、見ず知らずの他の人ではなし御恩になつた親方様の、一人で立派に建てらるるをよそながら視て喜びましょう、と元氣なげに云い出づるを走り氣の源太ゆるりとは聴いていず、ずいと身を進めて、馬鹿を云え十兵衛、あまり道理が分らな過ぎる、上人様のお諭きさましは汝一人に聴けというてなされたではない我われが耳にも入れられたは、汝の腹でも聞いたならば我の胸でも受け取つた、汝一人に重石おもしを背負しよつてそう沈しまれてしもうては源太が男

になれるかやい、つまらぬ思案に身を退ひいて馬鹿にさえなつて居ればよいとは、分別が摯くすみ実過ぎて至もつとも当とは云われまいぞ、おおそうならば我がすると得たりかしこで引き受けては、上人様にも恥かしく第一源太がせつかく磨みがいた侠気おとこもそこで廃すたつてしまふし、汝はもとより虻あぶはち蜂取らず、知恵のないにもほどのあるもの、そしては二人が何よかろう、さあそれゆえに美しく二人で仕事をしようというに、少しは氣まざいところがあつてもそれはお互い、汝が不足なほどにこつちにも面白くないのあるは知れきつたことなれば、双方忍耐がまんしあうとして忍耐のできぬわけはないはず、何もわざわざ骨を折つて汝が馬鹿になつてしまひ、幾日の心配を煙と消きやし天晴れな手腕うでを寝せ殺しにするにも当らない、のう十兵

衛、私の云うのが腑に落ちたら思案をがらりとし変えてくれ、源太は無理は云わぬつもりだ、これさなせ黙つて居る、不足か不承知か、承知してはくれないか、ええ私の了見をまだ呑み込んでくれないか、十兵衛、あんまり情ないではないか、何とか云うてくれ、不承知か不承知か、ええ情ない、黙つて居られてはわからない、私の云うのが不道理か、それとも不足で腹立ててか、と義には強くて情には弱く意地も立つれば親切も飽くまで徹す江戸ツ子腹の、源太は柔和やさしく問いかければ、聞き居るお浪は嬉しさの骨身に浸みて、親方様ああありがとうござりますると口には出さねど、舌よりも真実まことを語る涙をば溢あふらす眼まなこに、返辞せぬ夫の方を気遣づかいて、見れば男は露一厘身動きなさず無言にて思案の頭こゝろ重べく低た

れ、ぽろりぽろりと膝の上に散らす涙珠なみだの零おちて声あり。

源太も今は無言となりしばらくひとり考えしが、十兵衛汝はま
だわからぬか、それとも不足とおもうのか、なるほどせつかく望
んだことを二人でするは口惜しかろ、しかも源太を心しんにして副そえに
なるのは口惜しかろ、ええ負けてやれこうしてやろう、源太は副
になつてもよい汝を心に立てるほどに、さあさあ清く承知して二
人でしようと合点せい、と己おのが望みは無理に折り、思いきつてぞ
云い放つ。とツとんでもない親方様、たとえ十兵衛氣が狂えばと
てどうしてそうはできませんものぞ、もったいない、とあわてて云
うに、そうなら我の異見につくか、とただ一言に返されて、それ
は、と窮つまるをまた追っかけ、汝を心に立てようか乃至ないしそれでも不

足か、と烈しく突かれて度を失う傍にて女房が気もわくせき、親
 方様の御異見になぜまあ早く付かれぬ、と責むるがごとく恨みわ
 び、言葉そぞろに勧むれば十兵衛ついに絶体絶命、下げたる頭を
 徐かに上げ円つぶらまなこの眼を剥むき出して、一ツの仕事を二人でするは、よ
 しや十兵衛心になつても副になつても、厭なりやどうしてもでき
 ませぬ、親方一人でお建てなされ、私は馬鹿で終わります、と皆
 まで云わせず源太は怒つて、これほど事を分けて云う我の親切なまけを
 無にしてもか。はい、ありがとうはござりまするが、虚言うそは申せ
 ず、厭なりやできませんおのれ。汝よく云つた、源太の言葉にどうでも
 つかぬか。是非ひとないことでござります。やあ覚えていよこのつ
 そりめ、他の情ひとの分らぬ奴、そのようのこと云えた義理か、よし

よし汝に口は利かぬ、一生溝どぶでもいじつて暮せ、五重塔は気の毒ながら汝に指もささせまい、源太一人で立派に建てる、ならば手柄てんに批点てんでも打て。

其十六

えい、ありがとうございます、滅法界に酔いました、もう飲いけやせぬ、と空辞誼そらしぎはうるさいほどしながら、猪口ちよくもつ手を後へは退ひかぬがおかしき上戸じょうごの常態つね、清吉はや馳走酒ちそうざけに十分酔つたれど遠慮に三分の真面目をとどめて殊勝らしく坐り込み、親方の不る在すにこう爛醉へべでは済みませぬ、姉御と対酌さしでは夕暮を躍おどるように

なつてもなりませんからな、アハハむやみに嬉しくなつて来ました、もう行きましよう、はめを外はずすと親方のお眼玉だ、だがしかし姉御、内の親方には眼玉を貰もらつても私は嬉しいとおもつています、なにも姉御の前だからとて軽薄を云うではありませぬが、真ま実に内の親方は茶袋よりもありがたいとおもつています、いつぞやの凌りょううんいん雲院の仕事の時も鉄や慶けいを対むこうにしてつまらぬことから喧嘩けんかを初め、鉄が肩先へ大怪我をさせたその後で鉄が親から泣き込まれ、ああ悪かつた気の毒なことをしたと後悔してもこつちも貧的、どうしてやるにもやりようなく、困かけおちりきつて逃亡とまで思つたところを、黙つて親方から療治手当もしてやつて下された上、かけら半分叱こご言ことらしいことを私に云われず、ただ物もの和やさし

く、清てめえや汝喧嘩は時のはずみで仕方はないが氣の毒とおもつたら
 謝罪あやまつておけ、鉄が親の氣持もよかろし汝の寢覚めもよいとい
 ものだと心づけて下すつたその時は、ああどうしてこんなに仁慈なまけ
 深かろとありがたくてありがたくて私は泣きました、鉄に謝罪
 わけはないが親方の一言に堪忍がまんして私も謝罪りに行きましたが、
 それから異おつなものといつとなく鉄とは仲好しになり、今ではどつ
 ちにでもひよつとしたことあれば骨を拾つてやろうかもらおう
 かというぐらゐの交際つきあいになつたも皆親方のお蔭かげ、それに引き變
 え茶袋なんぞはむやみに叱言こゑごとを云うばかりで、やれ喧嘩をするな
 遊興あそびをするなとくだらぬことを小うるさく耳の傍はたで口説きます、
 ハハハイやはや話になつたものではありませぬ、え、茶袋とは母お

親ふくろのことです、なに酷ひどくはありませぬ茶袋でたくさんです、しかも渋をひいた番茶の方です、あツハハハ、ありがとうござります、もう行きましよう、え、また一本爛つけたから飲んで行けとおっしゃるのですか、ああありがたい、茶袋だと此方こちで一本というところを反あべこべ対よにもう廃せと云いますわ、ああ好い心持になりました、歌いたくなりましたな、歌えるかとは情ない、松づくしなぞはあいつに賞ほめられたほどこで、と罪のないことを云えばお吉も笑いを含んで、そろそろ惚のろけ気は恐ろしい、などと調からか戯かい居るところへ帰って来たりし源太、おおちようどよい清吉いたか、お吉飲もうぞ、支度させい、清吉今夜は酔つぶい潰れる、胴魔声の松づくしでも聞いてやる。や、親方立聞きして居られたな。

其十七

清吉酔うてはしまりなくなり、碎けた源太が談話はなしぶり捌さばけたお
 吉が接待とりなしぶりにいつしか遠慮も打ち忘れ、擬さされて辞いなまず受け
 てはつと干ほし酒さか盞さきの数重ねるままに、平常つねから可愛らしき紅あから
 顔を一層みずみずと、実の熟いつた丹波王母珠ほおずきほど紅うして、罪も
 なき高笑いやら相手もなしの空から示威りきみ、朋輩の誰の噂彼の噂、自お
 己のれが仮声こわいろのどこそで喝采やんやを獲たる自慢、奪あげられぬ奪られるの
 云い争いの末何楼なになの獅顔しかみ火鉢ひばちを盗り出さんとして朋とも友だちの仙の野
 郎おおしくじりが大失策をした話、五十間で地廻りを擲なぐつたことなど、縁に

引かれ図に乗つてそれからそれへと饒舌しやべり散らすうち、ふとのつ
 そりの噂に火が飛べば、とろりとなりし眼を急に見張つて、ぐに
 やりとしていし肩を聳そばだて、冷とうなつた飲みかけの酒を異おかしく
 唇まげながら吸い干し、一体あんな馬鹿野郎を親方の可愛がると
 いうが私わっちには頭てんからわかりませぬ、仕事といえは馬鹿丁寧はこで撈はび
 は一向つきはせず、柱一本鳴居しきい一ツで嘘をいえは鉋かんを三度も礪とぐ
 ような緩慢のろまな奴、何を一ツ頼んでも間に合たつた例ためしがなく、赤松の
 炉縁ろぶち一ツに三日の手間を取るといふのは、多方ああいふ手合だろ
 うと仙が笑つたも無理はありませぬ、それを親方が鼻ひい尻きにしたの
 で一時は正直のところ、濟みませんが私も金きんも仙も六も、あんま
 り親方の腹が大きすぎてそれほどでもないものを買ひ込み過ぎて

居るではないか、念入りばかりで気に入るなら我たちもこれから
 羽目板にも仕上げ鉋がんな、のろりのろりとしたたか清めて碁盤肌ごばんはだに
 でも削ろうかと僻ひがみを云ったこともありましたが、第一あいつは交つ
きあい際知らずで女郎買い一度一所にせず、好鬪しやもなべ鶏鍋つつき合つたこ
 ともない唐偏朴とうへんぼく、いつか大師だいしへ一同みんなが行く時も、まあ親方の身ま
 辺わりについて居るものを一人ばかり仲間はずれにするでもない私
 が親切に誘つてやったに、我は貧乏で行かれないと云つたきりの
あいさつ挨拶は、なんと愛想も義理も知らな過ぎるではありませんか、
 銭がなければ女房かかの一枚着を曲げ込んで交際は交際きで立てるが
ともだち朋友ともだちずく、それもわからない白痴たわけの癖に段々親方の恩を被きて、
 私や金と同じことに今ではどうか一人立ち、しかも憚はばかりながら青あお

つ涕ばなた垂らして弁当箱の持運び、木片こつぱを担いでひよろひよろ帰る餓が
 鬼きのころから親方の手についていた私や仙とは違つて奴は渡り者、
 次第を云えば私らより一倍深く親方をありがたいかたじけと思つて
 いなけりやならぬはず、親方、姉御、私は悲しくなつて来ました、
 私はもしものがあれば親方や姉御のためと云や黒煙あおの煽りを
 食つても飛び込むぐらいの了見は持つて居るに、畜生なツ、ああ人
 情さけない野郎め、のっそりめ、あいつは火の中へは恩を背負しよつても
 入りきるまい、ろくな根性はもつていまい、ああ人情ない畜生め
 だ、と酔いが凶らず云い出せし不平の中に潜り込んで、めそめそ
 めそめそ泣き出せば、お吉は夫の顔を見て、例いつもの癖が出て来たか
 と困つた風情はしながらも自己の胸にもつそりの憎さがあれば、

幾らかは清が言葉を道理もつともと聞く傾きもあるなるべし。

源太は腹に戸締りのなきほど愚かならざれば、猪口ちよくを擬さしつけ
 高笑いし、何を云い出した清吉、寝ぼけるな我の前だわ、三の切
 を出しても初まらぬぞ、その手で女でも口説きやれ、随分ころり
 と来るであろう、汝きさまが惚のろけた小蝶こちようさまのお部屋ではない、アツ
 ハハハと戯言おどけを云えばなお真面目に、木ず珠だまほどの涙を払うその
 手をぺたりと刺身皿さしみざらの中につっこみ、しゃくり上げ、戯しゃくりあげ 歎あけ
 て泣き出し、ああ情ない親方、私を酔よっぱらい 漢あいらい あしらいは情ない、
 酔よつてはいませぬ、小蝶たなんぞは飲たべませぬ、そういえばあいつ
 の面つらがどこかのつそりに似て居るようで口惜しくて情ない、のつ
 そりは憎い奴、親方の対むこうを張むつて大それた、五重の塔を生意氣

にも建てようなんとは憎い奴憎い奴、親方が和し過ぎるので増長
 した謀反人め、謀反人も明智あけちのようなは道理もつともだと伯龍はくりゆうが講
 釈しましたがあいつのようなは大悪無道ぶどう、親方はいつのつそりの
 頭を鉄扇で打ちぶました、いつ蘭丸らんまるにのつそりの領地をや与ると云
 いました、私は今にもしもあいつが親方の言葉に甘えて名を列ならべ
 て塔を建てれば打捨うちちやつてはおけませぬ、擲たき殺して狗いぬにくれま
 すこういうように擲かけらき殺して、と明德利あきどくりの横面いきなり打たたき飛
 ばせば、碎片かけらは散つて皿小鉢跳おどり出すやちんからり。馬鹿野郎め、
 と親方に大喝されてそのままにぐずりと坐すわりおとなしく居るか
 と思えば、散らかりし還原海苔もどしのりの上に額おしつけはや鼾いびき声なり。源
 太はこれに打ち笑い、愛嬌のある阿呆あほうめに搔かき巻まかけてやれ、と

云いつつ手酌にぐいと引っかけて酒氣を吹くことやや久しく、怒おこつて帰つて来はしたもののああでは高が清吉同然、さて分別がまだ要いるわ。

其十八

源太が怒つて帰りし後、腕こまぬ拱こまぬきて茫然ぼうぜんたる夫の顔をさし覗のぞきて、吐息つくづくお浪は歎じ、親方様は怒らする仕事はつまり手に入らず、夜の眼も合わさず雛ひながた形こしらまで製造こしらえた幾日の骨折りも苦勞も無益むだにした揚句の果てに他の氣持ひとを悪うして、恩知らず人情なしと人の口端にかかるのはあまりといえば情ない、女の差し出た

ことをいうとただ一口に云わるるか知らねど、正直律義りちぎもほどのあるもの、親方様があれほどに云うて下さる異見について一緒にしたとて恥辱はじにはなるまいに、偏僻張かたいじつてなんのつまらぬ意気地立て、それを誰が感心なと褒めほましよう、親方様の御料簡につけば第一御恩ある親方のお心持もよいわけ、またお前の名も上り苦勞骨折りの甲斐も立つわけ、三方四方みな好いになぜその気にはならぬか、少しもお前の料簡わたくしが妾の腹には合点のみこめぬ、よくまあ思案し直して親方様の御異見について従うては下されぬか、お前が分別かさえ更えれば妾がすぐにも親方様のところへ行き、どうにかあやまりこうにか謝罪云うて一生懸命精一杯、打ぶたれても擲たたかれても動くまいほど覺悟をきめ、謝罪つて謝罪つて謝罪り貫ぬいたらお情深い

親方様が、まさかについてまで怒つてばかりも居られまい、一時の料簡違ひは堪忍かにして下さることもあろう、分別しかえて意地張ばらずに、親方様の云われた通りして見る気にはならぬか、と夫思もいの一筋に口説くも女の道理もつともなれど、十兵衛はなお眼も動かさず、ああもう云うてくれるな、ああ、五重塔とも云うてくれるな、よしないことを思いたつてなるほど恩知らずとも云わりよう人情なしとも云わりよう、それも十兵衛の分別が足りないででかしたこと、今さらなんとも是非がない、しかし汝きこまの云うように思案しかえるはどうしても厭、十兵衛が仕事に手下は使おうが助言じよせんは頼むまい、人の仕事の手下になつて使われはしようが助言はすまい、榊組ますぐみも椽配たるきわりも我がする日には我の勝手、どこからどこまで

一寸たりとも人の指揮さしずは決して受けぬ、善いも悪いも一人で背負しよつて立つ、他の仕事ひとに使われればただ正直の手間取りとなつて渡されただけのことするばかり、生意気な差し出口は夢にもすまい、自分が主でもない癖に自己おのが葉色を際立てて異かわつた風を誇ほこり顔がの寄生木やどりぎは十兵衛の虫が好かぬ、人の仕事に寄生木となるも厭ならわが仕事に寄生木を容いるも虫が嫌えば是非やすめがない、和やさしい源太親方が義理人情を噛かみ砕いてわざわざ懲すすめ憑つて下さるは我にもわかつてありがたいが、なまじい我の心を生かして寄生木あしらいは情ない、十兵衛は馬鹿でもものつそりでもよい、寄生木になつて栄えるは嫌いじゃ、矮小けちな下草になつて枯れもしよう大樹おおきを頼まば肥料こやしにもなろうが、ただ寄生木になつて高く止まる奴らを日ごろ

いくらも見では卑しい奴めと心中で蔑視みさげていたに、今我が自然親方の情に甘えてそれになるのはどうあつても小恥かしゆうてなりきれぬわ、いつそのことに親方の指揮さしずのとおりこれを削れあれを挽ひき割れと使わるるなら嬉しけれど、なまじ情がかえつて悲しい、汝も定めてわからぬ奴と恨みもしようが堪忍かにしてくれ、ええ是非がない、わからぬところが十兵衛だ、ここがのつそりだ、馬鹿だ、白痴漢たわけだ、何と云われても仕方はないわ、ああツ火も小さくなつて寒うなつた、もうもう寝てでもしまおうよ、と聴きけば一々道理の述懐。お浪もかえす言葉なく無言となれば、なお寒き一室とまを照らせる行燈あんどんも灯花ちやうじに暗うなりにけり。

其十九

その夜は源太床に入りてもなかなか眠らず、いちばんどり一番鶏うがいちようず二番鶏を
 耳たしかに聞いて朝も平日つねよりははよう起き、含嗽うがいちようず手水に見ぬ
 夢を洗つて熱茶一杯に酒の残り香を払う折しも、むくむくと起き
 上つたる清吉ねぼれめ寝惚眼をこすりこすり怪訝けげんがお顔してまごつくに、お
 吉ともども噴飯ふきだして笑い、清吉ゆうべ昨夜はどうしたか、と颯なぶれば急に
 かしこまつて無茶苦茶に頭を下げ、つい御馳走になり過ぎていつ
 か知らず寝てしまいました、姉御、昨夜わっち私は何か悪いことでもし
 はしませぬか、と心配そうに尋ぬるもおかしく、まあ何でも好い
 わ、飯でも食つて仕事に行きやれ、と和やさしく云われてますます畏おそ

れ、恍然^{うつとり}として腕を組みしきりに考え込む風情^{ふぜい}、正直なるが可愛らし。

清吉を出しやりたる後、源太はなおも考えにひとり沈みて日ごろの快活^{さっぱり}とした調子に似もやらず、ろくろくお吉に口さえきかで思案に思案を凝らせしが、ああわかつた^{ひとごと}と独り言するかと思えば、愍然^{ふびん}なと溜息つき、ええ抛^なげようかと云うかとおもえば、どうしてくりようと腹立つ様子を傍にてお吉の見る辛さ、問い慰めんと口を出せ^{いだ}ば黙つていよとやりこめられ、詮^{せんかた}方なさに胸の中にて空しく心をいたむるばかり。源太はそれらに関^{かま}いもせず夕暮方まで考え考え、ようやく思い定めやしけんつと身を起して衣服をあらため、感応寺に行き上人^{まみ}に見えて昨夜の始終をば隠すこと

なく物語りし末、一旦は私もあまりわからぬ十兵衛の答えに腹を立てしもの帰つてよくよく考うれば、たとえば私一人して立派に塔は建つるにせよ、それではせつかくお諭しさとを受けた甲斐なく源太がまた我欲にばかり強いようおとこで男児らしゆうもない話し、というて十兵衛は十兵衛の思わくを滅多に捨てはすまじき様子、あれも全く自己おのれを押えて譲れば源太も自己を押えてあれに仕事をさせ下されと譲らねばならぬ義理人情、いろいろ愚かな考えを使つてようやく案じ出したことにも十兵衛が乗らねば仕方なく、それを怒つても恨んでも是非のないわけ、はやこの上には変つた分別も私には出ませぬ、ただ願うはお上人様、たとえば十兵衛一人に仰せつけられますればとて私かならず何とも思いますまいほどに、

十兵衛になり私になり二人ともどもになりどうとも仰せつけられて下さりませ、御口ずからのことなれば十兵衛も私も互いに争う心は捨てておりまするほどに露さら故障はござりませぬ、我ら二人の相談には余つて願いにまいりました、と実意を面に現わしつゝ願えば上人ほくほく笑われ、そうじやろそうじやろ、さすがに汝も見上げた男じゃ、よいよい、その心がけ一つでもう生雲塔見事に建てたより立派に汝はなつておる、十兵衛も先刻さつきに来て同じことを云うて帰ったわ、あれも可愛い男ではないか、のう源太、可愛がつてやれ可愛がつてやれ、と心ありげに云わるる言葉を源太早くも合点して、ええ可愛がつてやりますとも、といと清すずしげに答うれば、上人満面皺しわにして悦よろこびたまいつ、よいわよいわ、あ

あ気味のよい男児じやな、と真から底からほめられて、もつたいなさはありながら源太おもわず頭こうべをあげ、お蔭かげで男児になれましてか、と一語に無限の感慨を含めて喜ぶ男泣き。はやこの時に十兵衛が仕事に助力せん心の、世に美しくも湧きたるなるべし。

其二十

十兵衛感応寺にいたりて朗円上人に見えまみ、涙ながらに辞退の旨云うて帰りしその日の味気なさ、煙草のむだけの気も動かすに力なく、茫ぼんやり然としてつくづくわが身の薄ふしあわせ命、浮世の渡りぐるしきことなど思い廻めぐらせば思い廻めぐらすほど嬉うれしからず、時刻にな

りて食う飯の味が今さら異れるではなけれど、箸持つ手さえ躊躇
 いがちにて舌が美味うは受けとらぬに、平常は六碗七碗を快う喫
 いしもわずかに一碗二碗で終え、茶ばかりかえつて多く飲むも、
 心に不悦ますさのある人の免れがたき慣例ならいなり。

あるし主人が浮かねば女房も、何の罪なきやんちやぎかりの猪いの之まで

おのず自然と浮き立たず、淋さびしき貧家のいとど淋しく、希望のぞみもなければ

たのしみ快樂も一点あらで日を暮らし、暖か味のない夢に物寂ものさびた夜を

明かしけるが、お浪暁あかつき天の鐘に眼覚めて猪之と一所に寝たる床

よりそつと出づるも、朝風の寒いに火のないうちから起すまじ、

も少し睡ねさせておこうとの慈やさしき親の心なるに、何もかも知らない

でたわいなく寝ていし平生いっしょとは違い、どうせしことやらたちまち

飛び起き、襦袢じゆばん一つで夜具の上跳ね廻り跳ね廻り、厭じやい厭じやい、父様を打ぶつちや厭じやい、と蕨わらびのような手を眼にあてて何かは知らず泣き出せば、ええこれ猪之はどうしたもので、とびつくりしながら抱き止むるに抱かれながらもなお泣き止まず。誰も父様を打ちはしませぬ、夢でも見たか、それそこに父様はまだ寝て居らるる、と顔を押し向け知らずれば不思議そうに覗き込んで、ようやく安心しはしてもまだ疑惑うたがひの晴れぬ様子。

猪之やなんにもありはしないわ、夢を見たのじゃ、さあ寒いに風邪をひいてはなりません、床にはいつて寝て居るがよい、と引き倒すようにして横にならせ、搔かまきまき巻かけて隙間すきまなきよう上から押しつけやる母の顔を見ながら眼をぱっちり、ああ怖こわかった、今

よその怖い人が。おゝおゝ、どうかしましたか。大きな、大きな鉄槌げんのうで、黙もくつて坐まつて居る父様の、頭かぶを打うつて幾いくつも打うつて、頭かぶが半分こわ砕くだれたので坊は大變おそろびおそろしくりした。ええ鶴亀つるかめ、厭いやなこと、延喜えんぎでもないことを云いう、と眉まゆを皺しわむる折まも折ま、戸外おもてを通とおる納豆なづな売りの戦いくさえ声こゑに覚おぼえある奴やつが、ちエツ忌いまいま々ましい草鞋わらじが切きれた、と打うち独語つぶやきて行いき過すぐるに女房にようばますます氣色きしきを悪あしくし、台所だいしよに出でて釜かまの下したを焚たきたつくれば思おもうごとく燃もえまざる薪まきも腹はら立たしく、引窓ひんすゐの滑すべりよく明あかぬも今いまさらのように焦じれたく、ああ何なにとなく厭いやな日ひと思おもうも心こゝろからぞとは知しりながら、なお氣きになることのみ氣きにすればにや多おほけれど、また云いい出でさば笑われんと自分じぶんで呵しかつて平日ひんじつよりは笑わ顔がほをつくり言葉ことばにも活いき氣きをもたせ、いき

いきとして夫をあしらい子をあしらえど、根がわざとせし偽飾いつわりなればかえつて笑いの尻声うれいが憂愁うれいの響きを遺ありさまして去る光景ありさまの悲しげなるところへ、十兵衛殿お宅か、と押柄おうへいに大人びた口ききながらはいり来る小坊主、高慢にちよこんと上り込み、御用あるにつきすぐと来たられべしと前後あとさきなしの棒口上。

お浪も不審、十兵衛も分らぬことに思えども辞いなみもならねば、

はや感応寺の門くぐるさえ無益むやくしくは考えつつも、何御用ぞと行つて問えば、天地顛てんどう倒たふさこりやどうじゃ、夢か現うつつか真実か、円道

右に為右衛門左に朗円上人まんなか中央まんなかに坐したもうて、円道言葉おご

そかに、このたび建立なるところの生雲塔の一切工事川越源太に任せられべきはずのところ、方丈おぼ思しめし寄らるることあり格別

の御詮議例外の御慈悲をもつて、十兵衛その方ほうにしかとお任せ相
 成る、辞退の儀は決して無用なり、早々ありがたく御受け申せ、
 と云い渡さるるそれさえあるに、上人皺枯れたる御声にて、これ
 十兵衛よ、思う存分し遂げて見い、よう仕上らば嬉しいぞよ、と
 荷担になうに余る冥加みよすがのお言葉。のっそりハツと俯伏うつぶせしまま五体
 を濤なみと動ゆるがして、十兵衛めが生命いのちはさ、さ、さし出しまする、と
 云いしぎり咽塞のどふさがりて言語絶え、岑しんかん閑とせし広座敷に何をか語
 る呼吸の響き幽かすかにしてまた人の耳に徹しぬ。

其二十一

紅蓮ぐれんびやくれん 白蓮びやくれんの香においゆかしく衣袂たもとに裾すそに薰かおり来て、浮葉うきはに露つゆの玉たま
 動ゆらぎ立葉たちばに風かぜのそよ吹ふける面白おもしろの夏なつの眺望たうぼうは、赤蜻蛉あかとんぼ菱藻ひしもを瓢なぶ
 り初霜はつしも向むかうが岡おかの樹梢こすえを染そめてより全然さつぜんとなくなつたれど、赭たいし
 色いろになりて荷はの茎はすばかり情なさけのう立たてる間に、世よを忍しのびげの白鷺しらさぎ
 がそろりと歩あむ姿すがたもおかしく、紺青こんじょういろ色いろに暮くれて行く天そらによ
 うやく輝ひかり出です星ほしを背せ中に擦すつて飛とぶ雁かりの、鳴なき渡わたる音ねも趣味おもむき
 ある不しの忍ぼすの池いけの景色けいしきを下物さかなのほかの下物したにして、客きやくに酒さけをば亀
 の子こほど飲のまする蓬萊屋ほうらいやの裏うら二階にかいに、氣持きぢのよさそふな顔かほして
 欣然しんぜんと人ひとを待まちつ男おとこ一人ひとり。唐棧とうざんぞろ揃そろいの淡泊あつさりづくりに住吉張すけきちやうりの
 銀煙管ぎんえんくわんおとなしきは、職人しやくじんらしき俠氣きあひの風かぜの言語げんご拳動けんどうに見みえな
 がら毫末すこしも下卑したひぬ上品だち質しつ、いづれ親方おやぢ親方おやぢと多くおほくのものに立たてら

るる棟梁株とうりようかぶとは、かねてから知り居る馴染なじみのお伝という女が、
 さぞお待ち遠でござりましょう、と膳を置きつつ云う世辞を、待
 つ退屈つかまさに捕つかまえて、待ち遠で待ち遠で堪たまりきれぬ、ほんとに人の
 気も知らないで何をして居るであろう、と云えば、それでもお化し
 粧まいに手間の取れますが無理はないはず、と云いさしてホホと笑
 う慣れきつた返しの太刀筋。アハハハそれも道理もつともじゃ、今に來
 たらばよく見てくれ、まあ恐らくここに類はなからう、という
 ものだ。おや恐ろしい、何を散財おごつて下さります、そして親方、
 というものは御師匠さまでですか。いいや。娘さんですか。いいや。
 後家様。いいや。お婆ばあさんですか。馬鹿を云え可愛そうに。では
 赤ん坊。こいつめ人をからかうな、ハハハハハ。ホホホホとく

だらなく笑うところへ襖ふすまの外から、お伝さんと名を呼んでお連れ
 様と知らずれば、立ち上つて唐紙明けにかかりながらちよつと後
 ろ向いて人の顔へ異おつに眼をくれ無言で笑うは、お嬉しかろと調戲からか
 つて焦じらして底悦そこえつき喜さする冗談なれど、源太はかえつて心しんから
 おかしく思うとも知らずにお伝はすいと明くれば、のろりと入り
 来る客は色ある新造しんぞどころか香も艶もなき無骨男、ぼうぼう頭髪あたま
 のごりごり腮髯ひげ、面かおは汚よごれて衣服きものは垢あかづき破れたる見るから厭気
 のぞつとたつほどな様子に、さすがあきれて挨拶あいさつさえどぎまぎ
 せしまま急には出ず。

源太は笑みを含みながら、さあ十兵衛ここへ来てくれ、関かまうこ
 とはない大胡坐おおあぐらで楽たのしみにいてくれ、とおずおずし居るを無理に坐

に居^すえ、やがて膳部も具備^{そなわ}りし後、さてあらためて飲み干したる酒^{さかづき}盃^{さき}とつて源太は擬^さし、沈黙^{だんまり}で居る十兵衛^{むか}に對い、十兵衛、先刻^{さつき}に富松^{とみまつ}をわざわざ遣^やつてこんなところに来てもらつたは、何でもない、実は仲直りしてもらいたくてだ、どうか汝^{きさま}とわつさり飲んで互いの胸を和熟させ、過^こ日の夜^{ないだ}の我が云^{おれ}うたあの云い過ぎも忘れてもらいたいとおもうからのこと、聞いてくれこういうわけだ、過日の夜は実は我もあまり汝をわからぬ奴と一途^{いちず}に思つて腹も立つた、恥かしいが肝^{かんしやく}癩^いも起^こし業^{ごう}も沸^{にや}し汝の頭を打^ぶ砕^{つか}いてやりたいほどにまでも思うたが、しかし幸福^{しあわせ}に源太の頭が悪玉にばかりは乗つ取られず、清吉めが家へ来て酔つた揚句に云いちらした無茶苦茶を、ああ了見^{ちよ}のちよ小い奴はつまらぬことを理

屈らしく恥かしくもなく云うものだと、聞いているさえおかしく
 て堪たまらなさにふとそう思つたその途端、その夜汝の家で陳ならべ立つ
 て来た我の云い草に気がついて見れば清吉が言葉と似たり寄つた
 り、ええ間違つた一時の腹立ちに捲まき込まれたか残念、源太男が
 廃すたる、意地が立たぬ、上人の蔑さげすみ視も恐ろしい、十兵衛が何もかも
 捨てて辞退するものを斜はすに取つて逆意さかいじ地たてれば大間違い、とは
 思つてもあまり汝のわからな過ぎるが腹立たしく、四方八方どこ
 からどこまで考えて、ここを推せばそこに襞ひずみが出る、あすこを
 立てればここに無理があると、まあ我の知恵分別ありたけ尽して
 我のためばかり籌はかるではなく云うたことを、むげに云い消された
 が忌いまい々いまいしくて忌々いまいしくて随分堪忍がまんもしかねたが、さていよいよ

了見を定めて上人様のお眼にかかり所存を申し上げて見れば、よいよいと仰せられたただの一言に雲霧はもうなくなつて、清しい風が大空を吹いて居るような心持になつたわ、昨日はまた上人様からわざわざのお招きで、行つて見たれば我を御賞美のお言葉数々のその上、よいよ十兵衛に普請一切申しつけたが蔭になつて助けてやれ、皆汝の善根福種になるのじや、十兵衛が手には職人もあるまい、彼がいよいよ取りかかる日には何人も傭うその中に汝が手下の者も交じろう、必ず猜忌邪曲など起さぬようにそれらには汝からよく云い含めてやるがよいとの細かいお諭し、何から何まで見透しでお慈悲深い上人様のありがたさにつくづく我折つて帰つて来たが、十兵衛、過日の云い過ごしは堪忍してくれ、

こうした我の心意気がわかつてくれたら従来通りいままで 浄く睦まじくきよむつ
 交際つきあつてもらおう、一切がこう定まって見れば何と思つた彼かと思
 ったは皆夢の中の物詮議、後に遺のこして面倒こそあれ益やくないこと、
 この不忍の池水にさらりと流して我も忘りよう、十兵衛汝も忘れ
 てくれ、木材きしなの引合い、鳶人とび足への渡りなんと、まだ顔を売り込
 んでいぬ汝にはちよつとしにくかろうが、それらには我の顔も貸
 そうし手も貸そう、丸まる 丁ちよう、山やま 六ろく、遠州屋えんしゆうや、いい問屋といやは皆
 馴染なじみでのうては先方さきがこつちを呑んでならねば、万事はがゆ齒痒いこと
 のないよう我を自由に出しに使え、め組めぐみの頭かしらの鋭次えいじというは短気
 なは汝も知つて居るであろうが、骨は黒鉄くろがね、性根玉はばかは憚りなが
 ら火の玉だと平常ふだん云うだけ、さてじっくり頼めばぐつと引き受け

一寸退かぬ頼もしい男、塔は何より地行じぎょうが大事、空風火水の四ツを受ける地盤の固めをあれにさせれば、火の玉銳次が根性だけでも不動が台座の岩より堅く基礎いしずえしかと据すえさすると諸肌もろはだぬいでしてくるは必ひつじょう定、あれにもやがて紹ひきあわ介しよう、もうこうなつた暁には源太が望みはただ一ツ、天晴あつぱれ十兵衛汝がよくしでかしさえすりやそれでよいのじゃ、ただただ塔さえよくできればそれに越した嬉しいことはない、かりそめにも百年千年末世に残つて云わば我たちの弟子筋の奴らが眼にも入るものに、へまがあつては悲しかろうではないか、情ないではなからうか、源太十兵衛時代にはこんなくだらぬ建物に泣いたり笑つたりしたそうなど云われる日には、なあ十兵衛、二人が舎利しゃりも魂たましい魄こばいも粉灰こなばいに

されて消し飛ばさるるわ、拙へたな細工で世に出ぬは恥もかえつて少ないが、遺したものを弟子めらに笑わる日には馬鹿親父おやしが息子に異見さると同じく、親に異見を食う子より何段増して恥かしかろ、生き礫はりつけ 刑より死んだ後塩漬の上礫刑になるような目にあつてはならぬ、初めは我もこれほどに深くも思い寄らなんだが、汝が我の対面むこうにたったその意気張りから、十兵衛に塔建てさせ見よ源太に劣りはすまいというか、源太が建てて見せくりよう何十兵衛に劣ろうぞと、腹の底には木を鑽きつて出した火で観みる先の先、我意はなんにもなくなつただだよくできてくれさえすれば汝も名ほ誉まれ我も悦び、今日はこれだけ云いたいばかり、ああ十兵衛その大きな眼を湿うるませて聴きいてくれたか嬉しいやい、と磨みがいて礪といで礪

ぎ出した純粋きつすい江戸ツ子粘り気なし、一びんでなければ六と出る、忿い怒かりの裏やさしの温和やさしさもあくまで強き源太が言葉に、身動みじろぎさえせで聞きいし十兵衛、何も云わず豊とよに食いつき、親方か、堪忍かにして下され口がきけませぬ、十兵衛には口がきけませぬ、こ、こ、この通り、ああありがとうござりまする、と愚かしくもまた真実まことにただ平伏ひれふして泣きいたり。

其二十二

言葉はなくても真情まことは見ゆる十兵衛が拳動そぶりに源太は悦び、春風みず湖みずを渡かすみつて霞日かすみに蒸すともいうべき温和の景色を面にあらわし、

なおもやさしき語気なだらか円暢かに、こう打ち解けてしもうた上は互い
 にまずいこともなく、上人様の思おぼしめ召しにもかない我たちの一いちぶ
 分ぶんも皆立つというもの、ああなんにせよ好い心持、十兵衛汝も
 過してくれ、我も充分今日こそ酔おう、と云いつつ立つて違ちがい柵だ
 に載せて置いたる風呂敷包みとりおろし、結び目といふて一ふたつかね束こ
 にせし書かきもの類れいだし、十兵衛が前に置き、我にあつては要なき此
 品きしなの、一ツは面倒な材木の委細くわしい当りを調べたのやら、人足か
るこ子こそのほかさまさまの入目を幾晩かかかってようやく調べあげた
 積り書、また一ツはあすこをどうしてここをこうしてと工夫に工
 夫した下絵図、腰屋根の地割りだけなもあり、平地ひらじ割りだけなの
 もあり、初重の仕形だけのもあり、二手先または三手先、出し組

ばかりなるもあり、雲形波形唐草からくさ生類しやうるい彫物のみを書きしも
 あり、何よりかより面倒なる真柱から内うちのりなげし法長押腰長押切目長押
 に半長押、縁板縁えんいたかつら亀腹柱高欄垂木榭肘木たるきますひじき、貫ぬきやら角木すみぎの
 割合算法、墨繩すみの引きよう規尺かねの取りよう余さず洩もらさず記せし
 もあり、中には我のせしならで家に秘めたる先祖の遺品かたみ、外へは
 出せぬ絵図もあり、京都きやうやら奈良の堂塔を写しとりたるものもあ
 り、これらはみんな汝きさまに預くる、見たらば何かの足しにもなる、
 と自己おのが精神こころを籠こめたるものを惜しげもなしに譲りあたうる、胸
 の広さの頼たのもしきを解げせぬというにはあらざれど、のつそりもま
 た一気性ひと、他の巾きんちやく着ひくとでわが口濡ぬらすようなことは好まず、親
 方まことにありがとうはござりまするが、御親切は頂戴いただいたも同

然、これはそちらにお納めを、と心はさほどになけれども言葉に
 膠にべのなさ過ぎる返辞をすれば、源太大きに悦ばず。此品これをば汝は
 要いらぬと云うのか、と慍いかりを底に匿かくして問うに、のつそりそうと
 は気もつかねば、別段拝借いたしても、と一句うっかり答うる途
 端、鋭き気性の源太は堪たまらず、親切の上親切を尽してわが知恵思
 案を凝らせし絵図までやらんというものを、むげに返すか慮外な
 り、何ほど自己おのれが手腕うでのよくて他の好情ひと なさけを無にするか、そもそも
 最初に汝おのれめがわが対岸むこうへ廻わりし時にも腹は立ちしが、じつと堪こら
 えて争わず、普通なみたいてい大体のものならばわが庇蔭被かげきたる身をもつて一
 つ仕事に手を入るるか、打ち擲たたいても飽かぬ奴と、怒つて怒つて
 どうにもすべきを、可愛かわゆきものにおもえばこそ一言半句の厭味も

云わず、ただただ自然の成行きに任せおきしを忘れしか、上人様のお諭しを受けての後も分別に分別渴^からしてわざわざ出かけ、汝のために相談をかけてやりしも勝手の意地張り、大体ならぬものとても堪^{がまん}忍なるべきところならぬを、よくよく汝をいとしがればぞ踏^{こた}み耐えたるとも知らざるか、汝が運のよきのみにて汝が手腕^{うで}のよきのみにて汝が心の正直のみにて、上人様より今度の工事命^{しごと}けられしと思ひ居るか、此品^{これ}をばやってこの源太が恩がましくでも思うと思うか、乃至^{ないし}はもはや慢氣の萌^{きざ}して頭^{てん}からなんのつまらぬものと人の絵図をも易く思うか、取らぬとあるに強いはせじ、あまりといえば人情なき奴、ああありがとうござりますると喜びを受けてこの中の仕様^{うち}を一^{ひと}所^{とこ}一^{ふた}所^{とこ}は用いし上に、あの箇所はお

蔭でうもう行きましたと後で挨拶あいさつするほどのことはあつても当然なるに、開あけて見もせず覗のぞきもせず、知れきつたと云わぬばかりに愛想も菅すげもなく要らぬとは、汝十兵衛よくも撥はねたの、この源太がした図の中に汝の知つたもののみあろうや、汝うぬらが工風の輪の外に源太が跳おどり出でずにあろうか、見るに足らぬとそちで思わばおのれ汝が手筋も知れてある、大方高の知れた塔建たぬ前から眼うつつに睨うつつつて気の毒ながら批難なんもある、もう堪忍の緒も断きれたり、卑劣きたない返報かえしはすまいなれど源太が烈はげしい意趣返報がえしは、する時なきでおくべきか、酸くなるほどに今までは口もきいたがもうきかぬ、一旦思しい捨しかえしつる上は口きくほどの未練ももたぬ、三年なりとも十年なりとも返報しかえしするに充分なことのあるまで、物蔭から眼を光らし

て睨みつめ無言でじつと待つててくりようと、気性が違えば思わ
 くも一二度ついに三度めで無残至極に齟齬くいちがい、いと物静かに言
 葉を低めて、十兵衛殿、と殿の字を急につけ出し叮嚀ていねいに、要ら
 ぬという凶はしまいましょ、汝そなた一人で建つる塔定めて立派にでき
 ようが、地震か風のあるう時壊こわるることはあるまいな、と軽くは
 云えど深く嘲ける語ことばに十兵衛も快よからず、のっそりでも恥辱はじは
 知っております、と底力味ある楔くさびを打てば、なかなか見事な一言
 じゃ、忘れぬように記憶おぼえていようと、釘くぎをさしつつ恐ろしく睥にら
 みて後は物云わず、やがてたちまち立ち上つて、ああとんでもな
 いことを忘れた、十兵衛殿ゆるりと遊んでいてくれ、我は帰らね
 ばならぬこと思ひ出した、と風のごとくにその座を去り、あれと

いう間に推量勘定、幾金か遺してふいと出つ、すぐその足で同じ
 町のある家が闖またぐや否、厭だ厭だ、厭だ厭だ、つまらぬくだ
 らぬ馬鹿馬鹿しい、ぐずぐずせずと酒もて来い、蠟燭いじつて
 それが食えるか、鈍痴め肴で酒が飲めるか、小兼春吉お房蝶
 子四の五の云わせず搦んで来い、臍の達者な若い衆頼も、我家
 へ行て清、仙、鉄、政、誰でも彼でもすぐに遊びによこすよう、
 という片手間にぐいぐい仰飲る間もなく入り来る女どもに、今晚
 なぞとは手ぬるいぞ、とまつ向から焦躁を吹っかけて、飲め、酒
 は車懸り、猪口は巴と廻せ廻せ、お房外見をするな、春婆大
 人ぶるな、ええお蝶めそれでも血が循環つて居るのか頭上に鼬
 花火載せて火をつくるぞ、さあ歌え、じゃんじやんとやれ、小

兼ね気持のいい声を出す、あぐり踊るか、かぐりもつと跳ねろ、
 やあ清吉来たか鉄も来たか、なんでもいい滅茶滅茶に騒げ、我に
 嬉しいことがあるのだ、無礼講にやれやれ、と大将無法の元気な
 れば、後れて来たる仙も政も煙けむに巻かれて浮かれたち、天井抜き
 ようが根太抜きようが抜けたら此方こちのお手のものと、飛ぶやら舞
 うやら唸うなるやら、潮来出島いたこでしまもしおらしからず、甚句とききに鬨とぎの声を湧
 かし、かっぱれに滑すべつて転倒ころび、手品てずまの太鼓を杯洗で鉄がたたけ
 ば、清吉はお房が傍かたわらに寝転んで銀かんざし釵しにお前まへそのよに酔よばかり飲
 んでを稽古する馬鹿騒ぎの中で、一了簡きやうあり顔の政が木遣きやうを丸め
 たような声しながら、北きたに峨が々がたる青山せいざんをと異おつなことを吐はき出
 す勝手ざんまい三昧まい、やつちやもつちやの末けんは拳けんも下卑おつて、乳房ちちの脹ふくれ

た奴が臍の下に紙幕張るほどになれば、さあもうここは切り上げてと源太が一言、それから先はどこへやら。

其二十一

蒼たかの飛ぶ時よそ視みはなさず、鶴なら鶴の一点張りに雲をも穿うがち風にも逆むかつて目ざす獲物の、咽喉のどぼとけ仏ひつつか把ひつつか攫ひつつかまでは合点せざるものなり。十兵衛いよいよ五重塔の工事しごとするに定まってより寝ても起きてもそれ三昧さんまい、朝の飯喫くうにも心の中では塔を噬かみ、夜の夢結ぶにも魂たましい魄たましいは九輪の頂を繞めぐるほどなれば、まして仕事にかかつては妻あることも忘れ果て児このあることも忘れ果て、昨日きのう

の我を念頭に浮べもせず明日の我を想いもなさず、ただ一斬ちやうなふり
 あげて木を伐きるときは満身の力をそれに籠こめ、一枚の函をひく時
 には一心の誠をそれに注ぎ、五尺の身体こそ犬鳴きとり鶏とり歌い権兵衛
 が家に吉慶よろこびあれば木工右衛門もくえもんがところに悲かなしみ哀ある俗世あに在り
 もすれ、精神こころは紛たる因縁とに奪られで必死とばかり勤め励めば、
 前さきの夜源太に面白からず思われしことの氣にかからぬにはあらざ
 れど、日ごろののつそりまますます長じて、はやいづくにか風吹き
 たりしぐらいに自然軽う取り做なし、やがてはとんと打ち忘れ、た
 だただ仕事にのみかかりしは愚かなるだけ情に鈍くて、一ひとすじ条道みち
 より外へは駈かけぬ老牛おいうしの痴おろに似たりけり。

金箔きんぱく 銀箔ぎんぱく 瑠璃るり 真珠しんじゆ 水すい 精しよう 以上合せて五宝、
 丁子ちやうじ 沈香じんこう

はくきよう
白 膠くんろく 白 檀びやくだん

以上合わせて五香、そのほか五葉五穀ま

で備えて

大 土 祖 神 壇 山 彦 神 壇 山 媛 神

あらゆる鎮護

の神々を祭る地鎮の式もすみ、地曳じびき土取り故障なく、さて竜いしず

伏えはその月の生氣の方より右旋みぎめくりに次第据すえ行き五星を祭り、

斬ちようなはじ 初はじめの大礼には鍛冶かじの道をば創はじめられし天あまの目一箇まひとつの命、

番匠ひらの道關ておきほおいかれし手置帆負みことの命彦狭知みことの命より思おもい兼かねの命天児みこあまつ

屋根こやねの命太玉みことの命、木の神かみという句々くくのち 廼な馳かみの神まで七神祭り

て、その次の清きよ 鉋がんなの礼も首尾よく済み、東方提頭とうほうたいとらだじ頼てん 持国ちこく

天王てんおう、西方尾嚙さいほうびろしや又また広目天王こうもくてんおう、南方毘留勒なんぼうびるろしや又また増長天ぞうちようてん、北

方毘沙門多聞天王ほうびしゃもんたもんてんおう、四天にかたどる四方の柱千年万年動ゆるぐな

と祈り定むる柱立はしらだて式、天星色星多願てんせいしきせいたがんの玉ぎよくじよ 女三神にょさんじん、貪たんろ

狼うぎよもん巨門等北斗の七星を祭りて願う永久安護、順に柱のかりくさび仮轄

を三ツずつ打つて脇わきつかさ司しに打ち緊めさする十兵衛は、幾干いくその

苦心もここまで運べば垢穢きたなきかお顔にも光の出るほど喜よろこび悦こに気の勇

み立ち、動きなき下津盤根しもついわねの太柱と式にて唱うる古歌さえも、何

とはなしにつくづく嬉しく、身を立つる世のためしぞとその下の

句を吟ずるにも莞爾にここにしつつ二たびし、壇に向うて礼拝つつし恭み、拍か

手しわでの音清く響かし一切成就はらいの祓はらいを終るここの光景さまには引きかえ

て、源太が家の物淋ものさびしさ。

あるじ主人は男の心強く思いを外には現わさねど、お吉は何ほどさば

けたりとてさすが女の胸小さく、出入るものに感応寺の塔の地曳

きの今日済みたり柱立式昨日済みしと聞きたびごとに忌いまいま々ましく、

嫉妬ほむらつの火炎衝おのれき上がりて、汝おのれ十兵衛恩知らずめ、良人うちの心の広い
 のをよいことにしてつけ上り、うまうま名を揚げ身を立つるか、
 よし名の揚あがり身の立たばさしずめ礼にも来べきはずを、知らぬ顔
 して鼻高々とその日その日を送りくさるか、あまりに性質ひとのよ過
 ぎたる良人も良人なら面憎はきのつそりめもまたのつそりめと、折
 にふれては八重縦横かんしゃくに癩は癩はの虫跳おのね廻らし、自己こびんが小鬢かの後
 れ毛上げて、ええ焦じれつたいと罪むじのなき髪かを搔かきむしり、一文
 貰もらいに乞食むすが来ても甲張どうえきり声おしやべりに酷むじく謝絶おしやべりりなどしけるが、ある日
 源太よもやまが不在むすのところへ心易どうえきき医者道おしやべり益おしやべりという饒舌おしやべり坊主遊おしやべりびに來
 たりて、四方よもやま八方よもやまの話の末、ある人に連れられてこのあいだ蓬菜
 屋よもやまへまいりましたが、お伝よもやまという女よもやまからききました一分始よもやま終よもやま、い

やどうも此方こちの棟梁は違つたもの、えらいもの、男児おとこはそうありたいと感服いたしました、とお世辞半分何の気なしに云い出でしことば詞を、手繰たぐつてその夜の仔細しさいをきけば、知らずにいてさえ口惜しききに知つては重々憎き十兵衛、お吉いよいよ腹を立ちぬ。

其二十四

清吉そなた汝は腑甲ふがい斐ない、意地も察しもない男、なぜ私には打ち明けてこないだの夜の始末をば今まで話してくれなかつた、私に聞かして気の毒おつと異に遠慮をしたものか、あまりといえけちば狭隘な根性、よしや仔細を聴いたとてまさか私うろたが狼狽えまわり動転するよ

うなことはせぬに、女と輕かろしめて何事も知らせずにおき隠し立てしておく良人の了簡うちのひとはともかくも、汝たちまで私を聾つんぼに盲目めくらにして済まして居るとはあまりな仕打ち、また親方の腹の中がみすみす知れていながらに平氣の平左で酒に浮かれ、女郎買いの供するばかりが男の能でもあるまいに、長閑のんき氣でこうして遊びに来るとは、清吉おまえ汝もおめでたいの、平生いつもは不在るすでも飲ませるところだが今日は私は関かまえない、海苔のり一枚焼いてやるも厭いとならくだらぬ世せけん間げな咄ばなしの相手するも虫が嫌う、飲みたくば勝手に台所へ行つて呑み口ひねりや、談話はなしがしたくば猫ねこでも相手にするがよい、と何も知らぬ清吉、道益が帰りし跡へ偶然ふと行き合せてさんざんにお吉が不機嫌を浴びせかけられ、わけもわからず驚きあきれて、へ

どもどなしつつだんだんと様子を問えば、自己おのれも知らずに今の今
 までいしことなれど、聞けばなるほどどうあつても堪忍がまんのならぬ
 のつそりの憎さ、生命いのちと頼むわが親方に重々恩を被きた身をもつて
 無遠慮過ぎた十兵衛めが処置振り、あくまで親切眞実の親方の顔
 踏みつけたる憎さも憎しどうしてくりよう。

ムム親方と十兵衛とは相撲すもうにならぬ身分の差ちがい、のつそり相手
 に争つては夜光の璧たまを小礫いしころに擲ぶつけるようなものなれば、腹は
 十分立たれても分別強く堪こらえて堪えて、誰にも彼にも鬱憤うつぶんを洩も
 らさず知らさず居らるるなるべし、ええ親方は情ない、ほかの奴
 はともかく清吉だけには知らしてもよさそうなものを、親方と十
 兵衛では此方こちが損、我われとのつそりなら損はない、よし、十兵衛め、

ただ置こうやと逸はやりきつたる鼻先思案。姉御、知らぬ中は是非がない、堪かに忍して下され、様子知つては憚はばかりながらも叱られてはおりますまい、この清吉が女郎買いの供するばかりを能の野郎か野郎でないか見ていて下され、さようならば、と後しりごえはげ声烈しく云い捨てて格子戸こうしどがらり明けつ放し、草履ぞうりもはかず後も見ず風より疾はやく駆け去れば、お吉今さら氣遣きづかわしくつづいて追っかけ呼びとむる二声三声、四声めにははや影さえも見えずなったり。

其二十五

材きを斫はつる斧よきの音、板削る鉋かんなの音、孔あなを鑿ほるやら釘打つやら丁々くぎ

かちかち響き忙しく、木片は飛んで疾風に木の葉の翻えるがごとく、鋸屑舞つて晴天に雪の降る感応寺境内普請場の景況賑やかに、紺の腹掛け頸筋に喰い込むようなをかけて小胯の切り上がった股引いなせに、つつかけ草履の勇み姿、さも伶俐げに働くもあり、汚れ手拭肩にして日当りのよき場所に蹲踞み、悠々然と鑿を研ぐ衣服の垢穢き爺もあり、道具搜しにまごつく小童、しきりに木を挽く日傭取り、人さまさまの骨折り氣遣い、汗かき息張るその中に、総棟梁ののっそり十兵衛、皆の仕事を監督りかたがた、墨壺墨さし矩尺もつて胸三寸にある切組を実物にする指図命令。こう截れあ穿れ、ここをどうしてどうやってそこにこれだけ勾配もたせよ、孕みが何寸凹みが何分と口でも知らせ墨

縄でも云わせ、面倒なるは板いたきれ片に矩尺の仕様を書いても示し、
 鶉うの目鷹たかの目油断なく必死となりてみずから励み、今しも一人の
 若わかもの伎しに彫物の画を描きやらんと余念もなしにいしところへ、野
 のしし

猪ほよりもなお疾く塵土ほこりを蹴立てて飛び来し清吉。

忿怒ふんどの面火玉のごとくし逆釣つたる目を一段視開みひらき、畜生、の

つそり、くたばれ、と大喝すれば十兵衛驚き、振り向く途端にま
 つ向より岩も裂けよと打ち下すは、ぎらぎらするまで研ぎ澄ませ
 ちちようなし鉞を縦にその柄にすげたる大工に取つての刀なれば、何かは堪たま
 らん避くる間足らず左の耳を殺そぎ落され肩先少し切り割さかれしが、
 し損じたりとまた踏ん込んで打つを逃げつつ、抛なげつくる釘箱才さ
 いいづちづち 槌墨壺矩尺かねざし、利器えもののなさに防すべぐ術なく、身を翻えして退のく機はずみに

足を突つ込む道具箱、ぐざと踏み貫く五寸釘、思わず転ぶを得た
 りやと笠かさにかかつて清吉が振り冠かぶつたる斬の刃先に夕日の光の閃きら
 りと宿つて空に知られぬ電いなずま光の、疾としや遅しやその時この時、
 背面うしろの方に乳虎一声、馬鹿め、と叫ぶ男あつて二間丸太に論もな
 く両もろず臍脆ねもろく薙なぎ倒せば、倒れてますます怒る清吉、たちまち勃む
 然つくと起きんとする襟えり元把もとつて、やい我おれだわ、血迷うなこの馬鹿
 め、と何の苦もなく斬もぎ取り捨てながら上からぬつと出す顔は、
 八方にら睨おまなこみの大眼、一文字口怒り鼻、渦うず巻まき縮れの両り鬢うびんは
 不動あざむを欺まくばかりの相そう形ぎよう。

やあ火の玉の親分か、わけがある、打捨うっちゃつておいてくれ、と
 力を限り払い除のけんと蹴もがき焦燥あせるを、栄螺さざえのごとき拳固げんこで鎮圧しずめ、

ええ、じたばたすれば拳はり殺すぞ、馬鹿め。親分、情ない、ここをここを放してくれ。馬鹿め。ええ分らねえ、親分、あいつを活いかしてはおかれねえのだ。馬鹿野郎め、べそをかくのか、おとなしくしなければまだ打ぶつぞ。親分ひど酷い。馬鹿め、やかましいわ、拳り殺すぞ。あんまり分らねえ、親分。馬鹿め、それ打つぞ。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親。馬鹿め。放。馬鹿め。お。馬鹿め馬鹿め馬鹿め馬鹿め、醜ざま態まを見ろ、おとなしくなつたらう、野郎我が家へ来い、やいどうした、野郎、やあこいつは死んだな、つまらなく弱い奴だな、やあ、どいつか来い、肝心の時は逃げ出して今ごろ十兵衛まわりが周圍まわりに蟻ありのように群たかつて何の役に立つ、馬鹿ども、こつちには亡もうじや者じやが

できかかつて居るのだ、鈍遅め、水でも汲んで来て打つ注^かけてやれい、落ちた耳を拾つて居る奴があるものか、白痴^{たわけ}め、汲んで来たか、関^{かま}うことはない、一時に手桶^{ておけ}の水みんな面へ打つける、こんな野郎は脆く生きるものだ、それ占めた、清吉ツ、すっかりしろ、意地のねえ、どれどれこいつは我が背負^{きず}つて行つてやろう、十兵衛が肩の疵^{きず}は浅^あかろうな、むむ、よしよし、馬鹿どもさようなら。

其二十六

源太居るかとはいり来たる鋭次を、お吉立ち上つて、おお親分

さま、まあまあ此方こちへと誘いざなえば、ずっと通つて火鉢の前に無遠慮
の大胡坐おおあぐらかき、汲んで出さるる桜湯を半分ばかり飲み干してお
吉の顔を視、面色いろが悪いがどうかしたか、源太はどこぞへ行つた
のか、定めしもう聴いたのであろうが清吉めがつまらぬことをしで
かしての、それゆえちよつと話があつて来たが、むむそうか、も
う十兵衛がところへ行つたと、ハハハ、敏捷すばやい敏捷い、さすがに
源太だわ、我われの思案より先に身体がとつくに動いて居るなぞは頼
もしい、なあにお吉心配することはない、十兵衛と御上人様に源
太が謝罪わびをしてな、自分の示しが足らなかつたで手下ての奴がとん
だ心得違いをしました。幾重いくえにも勘弁して下されと三ツ四ツ頭を
下げれば済んでしまうことだわ、案じ過しはいらぬもの、それで

も先方がぐずぐずいえば正面まともに源太が喧嘩を買つて破裂ばれの始末を
 つければよいさ、薄々聴いた噂では十兵衛も耳朶みみたぶの一本や半分
 斫きり奪とられても恨まれぬはず、随分清吉の軽躁おつちよこちよい行為いもちよい
 とおかしな洒落か知れぬ、ハハハ、しかし憫然かわいそに我の拳固を
 大分食くらつてうんうん苦しがつて居るばかりか、十兵衛を殺した後
 はどう始末が着くと我に云われてようやく悟つたかして、ああ悪
 かった、逸はやり過ぎた間違つたことをした、親方に頭を下げさす
 ようなことをしたかああ濟まない、自分の身体みうちの痛い日より後
 悔にぼろぼろ涙をこぼしている愍然ふびんさは、なんと可愛い奴ではな
 いか、のうお吉、源太は酷むごく清吉を叱つて叱つて十兵衛がとこへ
 謝罪あやまりに行けとまで云うか知らぬが、それは表向きの義理なりや

是非はないが、ここは汝おまえの儲け役もう、あいつをどうか、なあそれ、よしか、そこは源太を抱き寝するほどのお吉様にわからぬことはない寸法か、アハハハハ、源太がいなくて話も要いらぬ、どれ帰ろうかい御馳走は預けておこう、用があつたらいつでもおいで、とぼつぼつ語つて帰りし後、思えば済まぬことばかり。女の浅き心から分別もなく清吉に毒づきしが、逸りきつたる若き男の間違あいし出して可憫あわれや清吉は自己おのれの世を狭せばめ、わが身は大切だいじの所天おつとをまで憎うてならぬのつそりに謝罪せまらするようなり行きしは、時の拍子の出来事ながらつまりはわが口より出し過あやまち失、兎せん角せん何とすべきと、火鉢ふちの縁もたに凭ひじする肘ひじのついがつくりと滑すべるまで、我を忘れて思案しあんに思案凝こらせしが、思い定めて、おおそうじやと、

立つて筆筒たんすの大抽匣おおひきだし、明けて麝香じやこうの氣かとともに投げ出し取り
 出すたしなみの、帯はそもそも此家ここへ来し嬉し恥かし恐ろしのそ
 の時締めし、ええそれよ。ねだつて買つてもろうたる博多はくたに繻子しゆす
 に未練もなし、三枚重ねに忍ばるる往時むかしは罪のない夢なり、今は
 苦勞やまの山繭まゆ縞じま、ひらりと飛ばす飛八丈とびはちじょうこのごろ好みし毛万
 筋ちすじ、千筋ももすじ百筋ももすじ筋氣は乱るとも夫おもうはただ一筋、ただ一筋の唐か
 七糸帯ちしゆつちんは、お屋敷奉公せし叔母かたみが紀念だいじと大切ひめに秘蔵おんなたれど何か
 厭いとわん手放すを、と何やらかやらありたけ出して婢おんなに包ませ、夫
 の帰らぬそのうちと櫛くしこうがい笄もも手ばしこく小箱まに纏まとめて、さてそ
 れを無残よそや余所くらの蔵こもに籠ふところらせ、幾らかの金懐ふところ中に浅黄この頭巾小
 提灯ちようちん、闇夜やみよも恐れず鋭次やみよが家に。

其二十七

池の端の行き違いより翻然からりと変りし源太が腹の底、初めは可愛かわゆう思いしも今は小癩こしゃくに障さわつてならぬその十兵衛に、頭かしらを下げ両手あやまについて謝罪あやまらねばならぬ忌々いまいましさ。さりとして打ち捨ておかば清吉の乱暴も我が命令わいれいけてさせしかのよう疑がわれて、何も知らぬ身に心地快よからぬ濡衣ぬれぎぬ被きせられんことの口惜しく、たださえおもしろからぬこのごろよけいな魔がさして下らぬ心こころづか 労あいを、馬鹿馬鹿しき清吉めが拳動こぶるまいのためにせねばならぬ苦々しさにますます心平おだやか 穏おだやかならねど、処弁さばく道の処弁さばかで済むべきわけも

なければ、これも皆自然に湧きしこと、なんとも是非なしと諦めて厭々ながら十兵衛が家音問おとずれ、不慮の難をば訪い慰め、かつは清吉を戒むること足らざりしを謝わび、のつそり夫婦が様子を視みるに十兵衛は例の無言三昧、お浪は女の物やさしく、幸い傷も肩のは浅く大したことではござりませねばどうぞお案じ下されますな、わざわざお見舞い下されては実まことに恐れ入りまする、と如才なく口はきけど言葉遣いのあらたまりて、自然おのずとどこかに稜角かどあるは問わずと知れし胸うちの中、もしや源太が清吉に内々含めてさせしかと疑い居るに極まつたり。

ええ業ごうはら腹はらな、十兵衛も大方我をそう視て居るべし、とく時とき機の来よこの源太が返報しかえし仕様を見せてくれん、清吉ごとき卑劣けちな野

郎のしたことに何似るべきか、ちような 鉦で片耳殺ぎ取るごときくだらぬ
 ことを我がわがしようや、わが腹立ちは木片こつぱの火のぱつと燃え立ちす
 ぐ消ゆる、こち堪えも意地もなきようなることでは済まさじ承知せじ、
 今日の変事は今日の変事、わが癩癩はわが癩癩、まるで別なり関か
かりあい係なし、源太がしようは知るとき知れ悟らす時悟らせくれ
 んと、裏うちにいよいよ不平は懐いだけど露塵つゆちりほども外には出さず、義
 理の挨拶あいさつ見事に済ましてすぐその足を感応寺に向け、上人のお
 目通り願ねがい、一応自己おのれが隸属みうちの者の不埒ふちちをお謝罪わびし、わが家に帰
 りて、いざこれよりは鋭次に会い、その時清を押えくれたる礼を
 も演のべつその時の景状ようすをも聞きつ、また一ツにはさんざん清のしを罵
 り叱ののつて以後このちわが家このちに出入り無用と云いつつけくれんと立ち出で

かけ、お吉のいぬを不審してどこへと問えば、どちらへかちよと
 行て来るとしてお出でになりました、と何食わぬ顔で婢おんなの答え、口
 禁ちどめされてなりとは知らねば、おおそうか、よしよし、我おれは火の
 玉の兄あにぎがところへ遊びに行たとお吉帰らば云うておけ、と草履ぞうり
 つっかけ出合いがしら、胡麻竹ごまだけの杖つえとぼとぼと焼痕やけどげのある提ちよう
 灯ちん片手、老いの歩みの見る目笑止こちにへの字なりして此方へ来る
 婆ばば。おお清おふくろの母親ではないか。あ、親方様でしたか、

其二十八

ああ好いところでお眼にかかりましたがどちらへかお出かけで

ござりまするか、と忙せわしげに老婆ばばが問うに源太かろ軽く会釈して、ま
 あよいわ、遠慮せずと此方こちへはいりやれ、わざわざ夜道を拾うて
 来たは何ぞ急の用か、聴いてあげよう、と立ち戻れば、ハイハイ、
 ありがとうございます、お出かけのところを済みません、御免下
 さいまし、ハイハイ、と云いながら後に随ついて格子戸くぐり、寒
 かつたろうによう出て来たの、あいにくお吉かまもないで関かまうこと
 もできぬが、縮こまっていずとずっと前へ進でて火にでもあたるが
 よい、と親切に云うてくるる源太が言葉にいよいよ身を堅くして
 縮こまり、お構い下さいましては恐れ入りまする、ハイハイ、懐
 炉を入れておりますればこれで恰かつこう好こうでござりまする、と意久地
 なく落ちかかる水みず涕ばなを洲の立つた半天の袖で拭ふきながらはるか

下つて入口近きところに蹲まり、何やら云い出したそんな素振り、
 源太早くも大方察して老婆の心の中さぞかしと気の毒さ堪らず、
 よけいなことし出して我に肝煎らせし清吉のお先走りののしを罵り懲ら
 して、当分出入りならぬ由云いに鋭次がところへ行かんとせし矢
 先であれど、視ればわが子を除いては阿弥陀様よりほかに親しい
 者もなかるべきか弱き婆のあわれにて、我清吉を突き放さば身は
 腰弱弓の弦つるに断きられし心地して、在るに甲斐なき生命いのちながらえ
 んに張りもなく的もなくなり、どれほどか悲しみ歎いて多くもあ
 らぬ余生を愚痴の涙なみだの時雨しぐれに暮らし、晴れ晴れとした気持のする
 日もなくて終ることならんと、思いやれば思いやるだけ憫然ふびんさの
 増し、煙草ひね捻ひねつてつい居るに、婆ばばは少しくにじり出で、夜分まい

りましてまことに済みませんが、あの少しお願い申したいわけの
ござりまして、ハイハイ、もう御存知でもござりませうがあの
清吉めがとんだことをいたしましたそうで、ハイハイ、鉄五郎様
から大概は聞きました、平常ふだんからして気の逸はやい奴やつで、じきに打ぶ
つの斫きるのと騒さわぎましてそのたびにひやひやさせます、お蔭かげさ
まで一人前にはなっておりますてもまだ兒童がきのような真ま一いつこく酷く、
悪いことや曲まつたことは決してしませぬが取り上のぼせては分別ぶんべつのな
くなる困やっこつた奴やつで、ハイハイ、悪気は夢ゆめさらない奴やつでござります、
ハイハイそれは御存知で、ハイありがとうござります、どうい
筋すぢで喧嘩けんかをいたしましたか知りませぬが大それた手ちような斧きりぎりすなんぞを
振り舞まわしましたそうで、そうききました時は私が手斧てきりぎりすで斫きられ

たような心持がいたしました、め組の親分とやらが幸い抱き留めて下されましたとか、まあせめてもでござります、相手が死にでもしましたら彼あれめは下手人、わたくしは彼を亡くして生きて居る瀬はござりませぬ、ハイありがとうござります、彼めが幼ちいさい少さいときはひどい虫持で苦勞をさせられましたも大抵ではござりませぬ、ようやく中山の鬼子母神様の御利益ごりやくで満足には育ちましたが、癒なおりましたら七歳ななつまでにお庭の土を踏ませましようと申しておきながら、ついなにかにかまけてお礼参りもいたさせなかつたその御罰か、丈夫にはなりましたがああの通りの無鉄砲、毎々お世話をかけます、今日も今日とて鉄五郎様がこれこれと搔かい摘つまんで話されました時の私のびつくり、刃物を準備よういまでしてと聞いた時には、

ええまたかと思わずどつきり胸も裂けそうになりました、め組の親分様とかが預かつて下されたとあれば安心のようなものの、清めは怪我はいたしませぬかと聞けば鉄様の曖昧あいまいな返辞、別条はない案じるなど云わるるだけになお案ぜられ、その親分の家を尋ぬれば、そこへ汝おまえが行ったがよいか行かぬがよいか我われには分らぬともかくも親方様のところへ伺つて見ろと云いつ放しで帰つてしまわれ、なおなお胸むねがしくしく痛んでいても起つても居られませねば、留守を隣家となりの傘張りに頼んでようやく参りました、どうかめ組の親分とやらの家を教えて下さいまし、ハイハイすぐにまいりまするつもりで、どんな態さましておりまするか、もしやかえつて大怪我などして居るのではござりますまいか、よいものならば早

う逢あつて安堵あんどしとうござりまするし喧嘩の模様も聞きとうござり
まする、大丈夫曲つたことはよもやいたすまいと思つております
るが若い者のこと、ひよつと筋の違つた意趣でもしたわけなら、
相手の十兵衛様にまずこの婆ばあが一生懸命で謝罪り、婆はたといど
うされても惜しくない老おいぼ耄れ、生おいさ先きの長い彼めが人様に恨まれ
るようなことのないようにせねばなりません、とおろおろ涙にな
つての話し。始終を知らで一筋にわが子をおもう老いの繰言、こ
の返答には源太こまりぬ。

其二十九

八五郎そこに居るか、誰か来たようだ明けてやれ、と云われて、なんだ不思議な、女らしいぞと口の中で独語ながら、誰だ女嫌いの親分のところへ今ごろ来るのは、さあはいりな、とがらりと戸を引き退くれば、八ツさんお世話、と軽い挨拶、提灯吹き滅して頭巾を脱ぎにかかるは、この盆にもこの正月にも心付けしてくれたお吉と気がついて八五郎めんくらい、素肌一枚どてらの袷広がつて鼠色になりしふんどしの見ゆるを急に押し隠しなどしつ、親分、なんの、あの、なんの姉御だ、と忙しく奥へ声をかくるに、なんの尽しで分る江戸ッ児。おおそうか、お吉来たの、よく来た、まあそこらの塵埃のなさそうなところへ坐つてくれ、油虫が這つて行くから用心しな、野郎ばかりの家は不潔のが粧飾だから仕

方がない、我おれも汝おまえのような好かい鼻かでも持もつたら清きれ潔いにしようよ、アハハハと笑わえばお吉も笑わいながら、そうしたらまた不よ潔け不よ潔けと厳いしくお叱いじめなさるか知しれぬ、と互あいに二ふツ三さんツ冗むだ話ばなしして後、お吉少すくしく改かまり、清吉は眠ねておりまするか、どういいう様子か見てもやりたし、心にかかれば参まりました、と云いえば鋭えい次じも打うち領なずき、清は今がたすやすや睡ねついて起おきそうにもない容よう態たいじゃが、疵きずというて別べにあるでもなし頭あたまの顛さ骨らを打うち破わつたわけでもなければ、整ほ骨ねつぎ医い師しの先さつ刻き云いうには、ひどく逆さか上あしたところを滅め茶ちやに撲うたれたため一時は氣き絶ぜつまでもしたれ、保う証けあい大だいしたことはない由よし、見みたくばちよつと覗のぞいて見みよ、と先まに立たって導みちく後のちにつき行いくお吉、三さん疊じようばかりの部ぶ屋やの中なかに一切いっ夢むで眠ねり居ゐる清吉を

見るに、顔も頭も膨はれ上りて、このように撲うつてなしたる銳次の
 酷むごさが恨めしきまで可憫あわれなる態さまなれど、濟んだことの是非もなく、
 座に戻つて銳次むかに對い、我夫うちでは必ず清吉がよけいな手出しに腹
 を立ち、お上人様やら十兵衛への義理をかねて酷く叱るか出入り
 を禁とむるか何とかするでござりましようが、元はといえは清吉が
 自分の意恨でしたではなし、つまりは此方こちのことのため、筋の違
 った腹立ちをついむらむらとしたのみなれば、妾わたしはどうも我夫の
 するばかりを見て居るわけには行かず、ことさら少しわけあつて
 妾がどうかしてやらねばこの胸の濟まぬ仕誼しぎもあり、それやこ
 れやをいろいろと案じた末に浮んだは一年か半年ほど清吉こちに此地
 退のかすること、人の噂も遠のいて我夫の機嫌なほも治なほつたら取り成し

ようは幾らもあり、まずそれまでは上方あたりに遊んで居るよう
してやりたく、路用の金も調こしらえて来ましたれば少しなれどもお預
け申しまする、どうぞよろしく云い含めて清吉めに与やつて下さり
ませ、我夫はあの通り表裏のない人、腹の底にはどう思つても必
ず辛く清吉に一旦あたるに違いなく、未練げなしに叱りましよう
が、その時何と清吉がたとい云うても取り上げぬは知れたこと、
傍から妾が口を出しても義理は義理なりやしようはなし、さりと
て欲でしでかした咎とがでもないに男一人の寄りつく島もないように
して知らぬ顔ではどうしても妾が居られませぬ、彼あれが一人の母の
ことは彼さえいねば我夫にも話して扶助たすくるに厭は云わせまじく、
また厭けねんというような分らぬことを云いもしますまいなれば掛念は

なけれど、妾が今夜来たことやら蔭かげで清をばいたわることは、我夫へは当然秘密ないしよにして。わかつた、えらい、もう用はなからう、お帰りお帰り、源太が大抵来るかも知れぬ、撞でつくわ見しては拙ますかろう、と愛想はなけれど眞実はある言葉に、お吉嬉うれしく頼みおきて帰れば、その後へ引きちがえて来る源太、はたして清吉に、出入りを禁とむる師弟の縁断きるとの言い渡し。鋭次は笑つて黙り、清吉は泣いて詫わびしが、その夜源太の帰りしあと、清吉鋭次にまた泣かせられて、狗いぬになつても我や姉御夫婦の門辺は去らぬと唸うなりける。

四五日過ぎて清吉は八五郎に送られ、箱根の温泉いでゆを志して江戸を出でしが、それよりたどる東海道いたるは京か大阪の、夢はい

つでも東都あづまなるべし。

其三十

十兵衛傷を負うて歸つたる翌朝、平生いっものごとく夙とく起き出づればお浪驚いて急にとどめ、まあ滅相な、ゆるりと臥やすんでおいでなされおいでなされ、今日は取りわけ朝風の冷たいに破傷風にでもなつたら何となさる、どうか臥うがんでいて下され、お湯ももうじき沸きましようほどに含嗽うがいちようず手水もそこで妾がさせてあげましよう、と破れ土べつつい竈かにかけたる羽は虧かけ釜がまの下焚たきつけながら氣を揉もんで云えど、一向平氣の十兵衛笑つて、病人あしらいにされるまでの

ことはない、手拭だけを絞ってもらえば顔も一人で洗うたが好い
 気持じや、とたが籠ゆるの緩みし小こ盥だらにみずから水を汲み取りて、別段
 悩める容態ようすもなく平日ふだんのごとく振舞えば、お浪は呆あれきかつ案ずる
 に、のっそり少しも頓とん着じやくせず朝あさ食めし終しもうて立ち上り、いきな
 り衣物を脱ぎ捨てて股もも引腹掛ひきけ着きけにかかるを、とんでもない
 ことどこへ行かるる、何ほど仕事の大事じやとて昨日の今日は疵
 口の合あいもすまいし痛みも去るまじ、じつとしていよ身体を使う
 な、仔細はなけれど治癒なほるまでは万般よろず要つ慎つ第一と云われたお医
 者様の言葉さえあるに、無理お圧おしして感応寺に行かるる心か、強
 過ぎる、たとい行つたとして働はたらきはなるまじ、行かいでも誰たが咎とがみ
 よう、行かいで済すまぬと思おもわるるなら妾めかけがちよと一走り、お上人様

のお目にかかつて三日四日の養生を直じきじき々に願うて来ましょ、お
 慈悲深いお上人様の御承知なされぬ氣遣いない、かならず大切だいじに
 せいかるはずみ軽拳すなどおつしやるは知れたこと、さあ此衣これを着て家
 に引つ籠こみ、せめて疵口くちのすつかり密着くつつくまで沈静おちついていて下さ
 れ、とひたすらとどめ宥なだめ慰め、脱ぎしをとつてまた被きすれば、
 よけいな世話を焼かずとよし、腹掛はけ着せい、これは要らぬ、と
 利く右の手にて撥はね退くる。まあそう云わずと家いいて、とまた
 打ち被する、撥ね退くる、男は意気地女じょうは情、言葉あらそい果て
 しなければさすがにのつそり少し怒つて、わけの分らぬ女の分分で
 邪魔立まじまてするか忌いまいま々しい奴、よしよし頼まぬ一人ひとで着る、高たかの
 知れたる蚯蚓みみずば膨れに一日なりとも仕事を休んで職人かみどもの上かみに立

てるか、うぬ汝はちつとも知るまいがの、この十兵衛はおろかしくて
 馬鹿と常々云わるる身ゆえに職人どもが軽う見て、眼の前ではわ
 が指揮さしずに従い働くようなれど、蔭では勝手に怠惰なまけるやら譏そしるやら
 さんざんに茶にうわべして、表面こそ粧つくろえ誰一人真実仕事をよくし
 ようという意氣組持つてしてくるものはないわ、ええ情ない、
 どうかして虚飾みえでなしに骨を折つてもらいたい、仕事あぶらに膏を乗せ
 てもらいたいと、諭さとせば頭は下げながら横向いて鼻で笑われ、叱
 れば口あやまに謝罪かおつきられて顔色かおつきに怒られ、つくづく我が折つて下手に出
 ればすぐと増長さるる口惜しさ悲しさ辛さ、毎日毎日棟梁棟梁と
 大勢に立てられるは立派でよけれど腹の中では泣きたいようなこ
 とばかり、いっそ穴あなほ鑿りあなほで引つ使われたほうが苦しゆうないと思

うくらい、その中でどうかこうか此日^{ここ}まで運ばして来たに今日休
 んでは大事の蹟^{つまず}き、胸が痛いから早帰りします、頭痛がするで遅
 くなりましたと皆^{みんな}に怠惰^{なまけ}られるは必^{ひつじよう}定、その時自分が休んで
 居れば何と一言云いようなく、仕事が雨垂れ拍子^{あまだ}になつてできべ
 きものも仕損^{しそこな}う道理、万が一にも仕損じてはお上人様源太親方
 に十兵衛の顔が向けらりようか、これ、生きても塔ができねばな
 この十兵衛は死んだ同然、死んでも業^{わざ}をし遂げれば汝^{おやし}が夫は生き
 て居るわい、二寸三寸の手斧傷^{ちようなきず}に臥^ねて居られるか居られぬか、
 破傷風^{おそ}が怖ろしいか仕事のできぬが怖ろしいか、よしや片腕奪^とら
 れたとて一切成就の暁^{かご}までは駕籠^{かご}に乗つても行かではいぬ、まし
 てやこれしきの蚯蚓^{みみずば}膨れに、と云いつつお浪が手中より奪いとつ

たる腹掛けに、左の手を通さんとしてしか顰むる顔、見るに女房の争えず、争いまけて傷をいたわり、ついに半天股引まで着せて出しける心の中、何とも口には云いがたかるべし。

十兵衛よもや来はせじと思ひ合うたる職人ども、ちらりほらりと辰の刻ころより来て見てびつくりする途端、精出してくる嬉しいぞ、との一言を十兵衛から受けて皆冷汗をかきけるが、これよりみなみな一同励み勤め昨日に変わる身のこなし、一をきいては三まで働き、二と云われしには四まで動けば、のっそり片腕の用を欠いてかえつて多くの腕を得つ日にちにちしごと々工事はかど撈取り、肩疵治るころには大抵塔もできあがりぬ。

其三十一

時は一月の末つ方、のっそり十兵衛が辛苦経営むなしからで、感応寺生雲塔いよいよもの見事に出来上り、だんだん足場を取り除けば次第次第に露あらわるる一階一階また一階、五重巍ぎげん然と聳そびえしさま、金剛力士が魔軍を睥にら睨んで十六丈の姿を現じ坤こんじく軸動ゆるがす足ぶみして巖いわお上に突つ立ちたるごとく、天晴あっぱれ立派に建つたるかな、あら快よき細工振りかな、希けう有うじや未み曾ぞう有うじやまたあるまじと為右衛門より門番までも、初手ののっそりを軽かろしめたることは忘れて讚歎すれば、円道はじめ一いつさん山の僧徒も躍おどりあがつて歡喜よろこび、これでこそ感応寺の五重塔なれ、あら嬉しや、我らが頼む師

は当世に肩を比すべき人もなく、八宗九宗の碩徳たち虎豹鶴こひようかく鷺ろすと勝ぐれたまえる中にも絶類拔群にて、譬たとえば獅子王孔雀王ししおうくじやくお、
 う 我らが頼むこの寺の塔も絶類拔群にて、奈良や京都はいざ知

らず上野浅草芝山内、江戸にて此塔これに勝まさるものなし、ことさら塵土に埋もれて光も放たず終るべかりし男を拾いあげられて、心の宝珠たまの輝きを世に発出いだされし師の美德、困苦たゆに撓たゆまず知己むくに酬むくいてついにし遂げし十兵衛が頼もしさ、おもしろくまた美わしき奇因縁なり妙因縁なり、天のなせしか人のなせしかはたまた諸天善神の蔭かげにて操りたまいしか、屋おくを造るに巧妙たくみなりし達膩伽尊者たにかそんじやの尊そんはあれど世尊せそん在世の御時にもかく快きことありしをいまだきかねば漢土からにもきかず、いで落成の式あらば我偈げを作らん文を作ら

ん、我歌をよみ詩を作してな頌せんしよう讚せんひと詠ぜんひと記せんと、おのおの互いに語り合ひしは欲のみならぬ人間の情の、やさしくもまた殊勝なるに引き替えて、測りがたきは天の心、円道為右衛門二人が計らいとしていと盛んなる落成式しゅうぎょう執行の日もほぼ定まり、その日は貴賤男女の見物をゆるし貧者にあま剩れる金を施し、十兵衛その他をねぎ犒らい賞する一方には、また伎楽をぎがく奏して世に珍しき塔供養あるべきはずに支度とりどりなりし最中、夜半の鐘の音の曇つて平日には似つかず耳にきたなく聞えしがそもそも、漸々ぜんぜんあやしき風吹き出して、眠れる児童も我知らず夜具踏み脱ぐほど時候生暖かくなるにつれ、雨戸のがたつく響き烈はげしくなりまさり、闇に揉もまるる松柏こすえの梢こずえに天魔の号さけびものすごくも、人の心の平和

を奪え平和を奪え、浮世の榮華に誇れる奴らの胆きもを破れや睡ねむりを
 攪みだせや、愚物の胸に血の濤なみ打たせよ、偽物の面の紅き色奪とれ、斧おの
 持てる者斧ふるを揮え、矛ほこもてるもの矛を揮え、汝なんじらが鋭とき劍つるぎは餓うえ
 たり汝ら劍に食をあたえよ、人の膏あぶら血あぶらはよき食なり汝ら劍にあく
 まで喰わせよ、あくまで人の膏あぶら膩かを餌えと、号令かきびしく発する
 や否、猛風一陣どつと起つて、斧かをもつ夜やしや叉や矛もてる夜叉やしや餓えた
 る劍もてる夜叉、皆一齊あに暴れ出しぬ。

其三十二

長夜の夢を覚まされて江戸四里四方の老若男女、悪風来たりと

驚き騒ぎ、雨戸の横柄よこぎら子こしつかと挿させ、辛張り棒を強く張れと家々ごとに狼狽うろたゆるを、可愼あわれとも見ぬ飛天夜叉王、怒号の声音こわねだけだけしく、汝ら人を憚はばかるな、汝ら人間ひとに憚はばかられよ、人間は我らを軽かろんじたり、久しく我らを賤いやしみたり、我らに捧ささぐべきはずの定めにえの牲にえを忘れたり、這はう代りとして立つて行く狗いぬ、驕奢おごりの罍ねぐら巢ね作される禽とり、尻尾なき猿、物言う蛇、露誠まこと実なき狐の子、汚穢けがれを知らざる豕いのこの女め、彼らに長く侮あられてついにいつまで忍しのび得ん、我らを長く侮あらせて彼らをいつまで誇ほらすべき、忍しのぶべきだけ忍しのびたり誇ほらすべきだけ誇ほらしたり、六十四年はすでに過ぎたり、我らを縛しばせし機運の鉄鎖、我らを囚とらえし慈忍いじにんの岩窟いわやはわが神力にてちぎり棄すてたり崩潰くずれさしたり、汝ら暴あれよ今こそ暴あれよ、何十年の

恨みの毒氣を彼らに返せ一時に返せ、彼らが驕慢ほこりの氣の臭さを鉄て
 匣ついで山外さんげに攫つかんで捨てよ、彼らの頭こうべを地につかしめよ、無慈悲の
 斧の刃味のよさを彼らが胸に試みよ、慘酷ざんこくの矛、瞋恚しんいの劍の刃は
 糞くそと彼らをなしくれよ、彼らが喉のどに氷を与えて苦寒に怖れ顫わなかし
 めよ、彼らが胆に針を与えて秘密の痛みに堪えざらしめよ、彼ら
 が眼前めさきに彼らが生なしたる多数おおくの奢侈しゃしの子孫を殺して、玩物がんぶつの念
 を嗟歎さたんの灰の河に埋めよ、彼らは蚕兒かいこの家を奪いぬ汝ら彼らの家
 を奪えや、彼らは蚕兒の知恵を笑いぬ汝ら彼らの知恵を讚せよ、
 すべて彼らの巧みとおもえる知恵を讚せよ、大とおもえる意こころを讚
 せよ、美わしとみずからおもえる情を讚せよ、協かなえりとなす理を
 讚せよ、剛つよしとなせる力を讚せよ、すべては我らの矛の餌えなれば、

劍の餌なれば斧の餌なれば、讚して後に利器えものに餌かい、よき餌をつ
 くりし彼らを笑え、黽なぶらるるだけ彼らを黽なぶれ、急に屠ほぶるな黽なぶり殺
 せ、活いかしながらに一枚一枚皮を剥はぎ取れ、肉を剥はぎとれ、彼ら
 が心臓しんを鞣まりとして蹴けよ、枳からたち棘ちをもて背を鞭うてよ、歎息の呼吸いき涙
 の水、動悸どうきの血の音悲鳴の声、それらをすべて人間より取れ、残
 忍のほか快樂けらくなし、酷烈ならずば汝ら疾とく死ね、暴れよ進めよ、
 無法に住して放逸無慚無理無体に暴れ立て暴れ立て進め進め、神
 とも戦え仏をも擲たげ、道理を壊やぶつて壊りすてなば天下は我らかも
 のなるぞと、叱咤しつたするたび土石を飛ばして丑うしの刻より寅とらの刻、卯う
 となり辰たつとなるまでもちつとも止まず励ましたつれば、数万すまんの眷け
んぞく属勇みをなし、水を渡るは波を蹴かえし、陸おかを走るは沙すなを蹴か

えし、天地を塵埃ほこりに黄ばまして日の光をもほとほと掩おほい、斧を揮
 つて数寄者が手入れ怠りなき松を冷あざわら笑あざわらいつつほつきと斫きるあり、
 矛を舞わして板屋根にたちまち穴を穿うがつもあり、ゆさゆさゆさと
 怪力もてさも堅固なる家を動かし橋を揺がすものもあり。手ぬる
 し手ぬるし醋むじさが足らぬ、我に続けと憤怒ふんぬの牙噛み鳴らしつつ夜
 叉王の躍おどり上つて焦躁いらだてば、虚空こくうに充みち満ちたる眷属、おたけび
 鋭くおめき叫んで遮しやに無に暴威を揮うほどに、神前寺内に立てる
 樹も富家ふうかの庭に養かわれし樹も、声振り絞つて泣き悲しみ、見る見
 る大地の髪の毛は恐怖かしに一々じゆりつ豎立なし、柳は倒れ竹は割るる折
 しも、黒雲空に流れて櫛かしの実よりも大きな雨ばらりばらりと降
 り出せば、得たりとますます暴るる夜叉、垣かきを引き捨て堀へいを蹴倒

し、門をも破こわし屋根をもめくり軒端のきぼの瓦かわらを踏み砕き、ただ一揉みに屑屋くずやを飛ばし二揉み揉んでは二階を捻ねじ取り、三たび揉んではなにがしでら某寺をものの見事に潰ついし崩やくずし、どうどうと鬨ときをあぐるそのたびごとに心を冷やし胸を騒がす人々の、あれに気づかいこれに案ずる笑止の様を見ては喜び、居所さえもなくされて悲しむものを見ては喜び、いよいよ凶に乗り狼藉ろうぜきのあらん限りたくまを逞たくましゅうすれば、八百八町百万の人みな生ける心地せず顔色さらにならばこそ。

中にもわけて驚きしは円道為右衛門、せつかくわずかに出来上りし五重塔は揉まれ揉まれて九輪は動ゆらぎ、頂上の宝珠は空に得読めぬ字を書き、岩をも転ばすべき風の突っかけ来たり、楯をも貫

くべき雨のぶつかり来るたびたわ撓む姿、木のきし軋る音、復もどる姿、また
 撓む姿、軋る音、今にも傾くつがえ覆らんず様子に、あれあれ危し仕様
 はなきか、傾覆られては大事なり、止むる術すべもなきことか、雨さ
 え加わり来たりし上周囲まわりに樹木もあらざれば、未曾有の風に基礎どだい
 狭くて丈のみ高きこの塔の堪こころえんことのおぼつかなし、本堂さえ
 もこれほどに動けば塔はいかばかりぞ、風を止むる呪文はきかぬ
 か、かく恐ろしき大暴風雨おおあらしに見舞いに来べき源太は見えぬか、ま
 だ新しき出入りなりとて重々来ではかなわざる十兵衛見えぬか寛か
んたい怠ひとなり、他おのさえかほど気づかうに己おのがせし塔気よにかけぬか、あ
 れあれ危しました撓んだわ、誰か十兵衛招よびに行け、といえども天
 に瓦飛び板飛び、地上に砂利の舞う中を行かんといいものなく、

ようやく賞美の金に飽かして掃除人の七蔵爺しちぞうじじを出しやりぬ。

其三十三

耄碌頭もうろくずきん巾きんに首をつつみてその上に雨を凌しのがん準備よういの竹の皮笠
引き被かぶり、鳶子合羽とんびがつばに胴締めして手ごろの杖持ち、恐怖こわごわながら
烈風強雨の中を駈かけ抜けたる七蔵爺おやじ、ようやく十兵衛が家にいた
れば、これはまた酷むごいこと、屋根半分はもうとうに風に奪とられて
見るさえ気の毒な親子三人の有様、隅の方にかたまり合うて天井
より落ち来る点滴しずくの飛沫しづきを古筵ふるいざでわずかに避よけ居る始末に、さ
てもものつそりは気に働らきのない男と呆れ果てつつ、これ棟梁殿、

この暴風雨あらしにそうして居られては済むまい、瓦が飛ぶ樹が折れる、
 戸外おもてはまるで戦争いくさのような騒ぎの中に、汝おまえの建てられたあの塔は
 どうあろうと思わるる、丈は高し周囲まわりに物はなし基礎どだいは狭し、ど
 の方角から吹く風をも正面まともに受けて揺れるわ揺れるわ、旗はたご竿おほ
 どに撓こわんではきちきちと材きの軋きしる音ものすごの物ものすご 凄こわさ、今にも倒れるか
 壊こわれるかと、円道様も為右衛門様も胆を冷やしたり縮ましたりし
 て気が気ではなく心配して居らるるに、一体ならば迎いなど受け
 ずともこの天変を知らず顔では済まぬ汝おまえが出て来ぬとはあんま
 りな大勇、汝のお蔭で險難けんなんな使いをいつかり、忌々いまいましいこ
 の瘤こぶを見てくれ、笠は吹き攫さらわれるず濡ぬれにはなる、おまけに
 木片きざれが飛んで来て額おれにぶつかりくさったぞ、いい面の皮とは我が

こと、さあさあ一所に来てくれ来てくれ、為右衛門様円道様が連
 れて来いとおいつけの御命令だわ、ええびつくりした、雨戸が飛んで行
 てしもうたのか、これだもの塔が堪るものか、話しする間にもも
 う倒れたか折れたか知れぬ、ぐずぐずせずと身支度せい、はやく
 はやくと急せり立つれば、傍から女房も心配げに、出て行かるな
 ら途中が危険あぶない、腐つてもあの火事頭巾、あれを出しましよ冠かぶつ
 ておいでなされ、何が飛んで来るか知れたものではなし、外見みえよ
 りは身が大切だいじ、いくら襤褸ぼろでも仕方ない刺子絆ぼんてん纏も上に被きておい
 でなされ、と戸棚がたがた明けにかかるを、十兵衛不興げの眼で
 じつと見ながら、ああ構うてくれずともよい、出ては行かぬわ、
 風が吹いたとて騒ぐには及ばぬ、七歳殿御苦勞でござりましたが

塔は大丈夫倒れませぬ、なんのこれほどの暴風雨で倒れたり折れ
 たりするような脆もろいものではござりませねば、十兵衛が出かけて
 まいるにも及びませぬ、円道様にも為右衛門様にもそう云うて下
 され、大丈夫、大丈夫でござります、と泰おちつき然はらつて身動きも
 せず答うれば、七歳少し膨ふくれ面つらして、まあともかくも我と一緒に
 来てくれ、来て見るがよい、あの塔のゆさゆさきちきちと動くさ
 まを、ここにいて目に見ねばこそ威張つて居られるれ、御開帳のぼりの幟
 のように頭を振つて居るさまを見られたらなんぼ十兵衛殿寛おうよう潤
 な気性でも、お気の毒ながら魂たましい魄がふわりふわりとならるるで
 あり、それまた吹くわ、ああ恐ろしい、なかなか止みそうにもない

風の景色、円道様も為右衛門様も定めし肝を煎いつておらるるじやろ、さつさと頭巾なり絆纏きなり冠るとも被るともして出かけさつしやれ、とやり返す。大丈夫でござりまする、御安心なさつてお歸り、と突っぱねる。その安心がそう手易たやすくはできぬわい、とうるさく云う。大丈夫でござりまする、と同じことをいう。末には七蔵じ焦れこんで、なんでもかでも来いというたら来い、我の言葉とおもつたら違ちがうぞ円道様為右衛門様の御命令おいつけじゃ、と語気あらくなれば十兵衛も少し勃然むっとして、我わしは円道様為右衛門様から五重塔建たていといは命令いつけかりませぬ、お上人様は定めし風が吹いたからとて十兵衛よべとはおつしやりますまい、そのような情ないことを云うては下さりますまい、もしもお上人様までが塔危あぶないぞ

十兵衛呼べと云わるるようにならば、十兵衛一期の大事、死ぬか生きるかの瀬門せとに乗つかかる時、天命を覚悟して駈けつけましようなれど、お上人様が一言半句十兵衛の細工をお疑いなさらぬ以上は何心配のこともなし、余の人たちが何を云わりようと、紙を材きにして仕事もせず魔術てずまも手抜きもしていぬ十兵衛、天氣のよい日と同じことに雨の降る日も風の夜も楽々としております、暴風雨が怖こわいものでもなければ地震が怖うもござりませぬと円道様にいうて下され、と愛想なく云い切るにぞ、七歳仕方なく風雨の中を駈け抜けて感応寺に帰りつき円道為右衛門にこのよし云えば、さてもその場に臨んでの知恵のない奴め、なぜその時に上人様が十兵衛来いと仰せじやとは云わぬ、あれあれあの揺るる態さまを見

よ、汝^{きさま}までがのつそりに同化^{かぶ}れて寛怠^{かんたい}過ぎた了見^{りょうけん}じゃ、是非^{しはい}はな
い、も一度行つて上人様のお言葉じやと欺誑^{たばか}り、文句いわせず連
れて来い、と円道に烈しく叱られ、忌^{いま}々^{いま}しさに独語^{つふや}きつつ七蔵
ふたたび寺門を出でぬ。

其三十四

さあ十兵衛、今度は是非^{しはい}に來よ四の五のは云わせぬ、上人様の
お召しじやぞ、と七蔵爺^{じじ}いきりきつて門口から我^が鳴^なれば、十兵衛
聞くより身を起して、なにあの、上人様のお召しなさるとか、七
蔵殿それは眞実^{まこと}でござりまするか、ああなさけない、何ほど風の

強ければとて頼みきつたる上人様までが、この十兵衛の一心かけて建てたものを脆もろくも破壊こわるるかのように思し召されたか口惜しい、世界に我を慈悲の眼で見下さるるただ一つの神とも仏ともおもうていた上人様にも、真底からはわが手腕うでたしかと思われざりしか、つくづく頼もしげなき世間、もう十兵衛の生き甲斐なし、たまたま当時に双ならびなき尊たつとき智識に知られしを、これ一生の面目とおもつて空あだに悦よろこびしも真にはかなきしばしの夢、嵐あらしの風のそよと吹けば丹誠凝らせしあの塔も倒れやせんと疑うたがはるとは、ええ腹の立つ、泣きたいような、それほど我おれは腑ふのない奴やつか、恥をも知らぬ奴やつこと見ゆるか、自己おのれがしたる仕事はが恥辱はじを受けてものめのめ面つら押し拭ぬぐうて自己は生きて居るような男と我は見らるるか、た

とえばあの塔倒れた時生きていようか生きたかろうか、ええ口惜
 しい、腹の立つ、お浪、それほど我が鄙さもしかろうか、あゝあゝ生
 命のちももういらぬ、わが身体にも愛想の尽きた、この世の中から見
 放された十兵衛は生きて居るだけ恥辱をかく苦惱くるしみを受ける、ええ
 いつそのこと塔も倒れよ暴風雨もこの上烈しくなれ、少しなりと
 もあの塔に損じのできてくれよかし、空吹く風も地打つちつ雨も人間ひと
 ほど我には情つれなからねば、塔破壊こわされても倒されても悦びこそせ
 め恨みはせじ、板一枚の吹きめくられ釘一本の抜かるとも、味
 気なき世に未練はもたねばものの見事に死んで退のけて、十兵衛と
 いう愚魯漢ばかものは自己が業の粗漏てぬかりより恥辱を受けても、生命惜しさ
 に生いきながら存ながらえて居るような鄙劣けちな奴やつではなかりしか、かかる心を

もつていしかと責めては後にて弔われん、一度はどうせ捨つる身の捨て処よし捨て時よし、仏寺を汚すは恐れあれどわが建てしもの壊れしならばその場を一步立ち去り得べきや、諸仏菩薩もお許しあれ、生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てん、投ぐる五尺の皮囊は潰れて醜かるべきも、きたなきものを盛つてはおらず、あわれ男児の醇粹、清浄の血を流さんなれば愍然ともこそ照覧あれと、おもいしことやら思わざりしや十兵衛自身も半分知らで、夢路をいつの間にかたどりし、七蔵にさえどこでか分れて、ここは、おお、それ、その塔なり。

上りつめたる第五層の戸を押し明けて今しもぬつと十兵衛半身あらわせば、礫を投ぐるがごとき暴雨の眼も明けさせず面を打ち、

一ツ残りし耳までもちぎらんばかりに猛風の呼吸いきさせさえず吹き
 かくるに、思わず一足退きしが屈せず奮ふるつて立ち出でつ、欄つかを握
 んできつと睥にらめば天そらは五月さつきの闇やみより黒く、ただ囂ごうごう々たる風の音
 のみ宇宙みに充ちて物騒がしく、さしも堅固の塔なれど虚空に高く
 聳そびえたれば、どうどうどつと風の来るたびゆらめき動きて、荒浪
 の上に揉もまるる棚たななし小舟おふねのあわや傾くつがえ覆らん風情、さすが覚悟
 を極めたりしもまた今さらにおもわれて、一期の大事死生の岐路ちまた
 と八万四千の身の毛よだたせ牙咬かみしめて眼まなこを睜みはり、いざその時
 はと手にして来し六分鑿ろくぶのみの柄忘るるばかり引つ握んでぞ、天命
 を静かに待つとも知るや知らずや、風雨いとわず塔の周囲めぐりを幾た
 びとなく徘徊はいかいする、怪しの男一人ありけり。

其三十五

去る日の暴風雨は我ら生まれてからこのかた以来第一の騒ぎなりしと、
 常は何事に逢うても二十年前三十年前にありし例をためしひき出して古
 きを大げさに、新しきをわけもなく云い消すかたぎ氣質の老人としよりさえ、
 真底我折がおつて噂し合えば、まして天変地異をおもしろくで談話はなし
 の種子たねにするようの剽ひょうきん軽な若い人は分別もなく、後腹の疾やま
 ぬを幸い、どこの火の見が壊れたりかしの二階が吹き飛ばされ
 たりと、他の憂ひとい災難をわが茶受けとし、醜態ざまを見よ馬鹿欲から
 芝居の金主して何なにがし某め痛い目に逢うたるなるべし、さても笑止

あの小屋の潰れ方はよ、また日ごろより小面憎かりし横町の生花の宗匠が二階、お神楽だけのことはありしも気味よし、それよりは江戸で一二といわるる大寺の脆く倒れたも仔細こそあれ、実は檀徒から多分の寄附金集めながら役僧の私曲、受負師の手品、そこにはそのありし由、察するに本堂のあの太い柱も桶でがなあつたらうなどとさまさまの沙汰に及びけるが、いずれも感応寺生雲塔の釘一本ゆるまず板一枚剥がれざりしには舌を巻きて讚歎し、いや彼塔を作った十兵衛というはなんとえらいものではござらぬか、あの塔倒れたら生きてはいぬ覚悟であつたそうな、すでのことに鑿脚んで十六間真逆しまに飛ぶところ、欄干をこう踏み、風雨を睨んであれほどの大揉めの中にじつと構えていたとい

うが、その一念でも破壊こわるまい、風の神も大方血眼ちまなこで睨まれては遠慮が出たであろうか、甚五郎じんごろうこのかたの名人じゃ真の棟梁じゃ、浅草のも芝のもそれそれ損じのあつたに一寸一分歪ゆがみもせず退ずりもせぬとはよう造つたこと。いやそれについて話のある、その十兵衛という男の親分がまた滅法えらいもので、もしもちとなり破壊れでもしたら同職なかもの恥辱はじ知合いの面汚し、汝うぬはそれでも生きて居りようかと、とても再び鉄槌かなづちも手ちような斧も握ることのできぬほど引つ叱しかつて、武士で云わば詰腹同様の目に逢わしうと、ぐるぐる大雨を浴びながら塔の周囲まわりを巡つていたそうな。いやいや、それは間違い、親分ではない商売しょうばい上敵いたきじゃそうな、と我れ知り顔に語り伝えぬ。

暴風雨のために準備したく狂いし落成式もいよいよ済みし日、上人わ
 ざわぎ源太を召よびたまいて十兵衛とともに塔に上られ、心あつて
 雛僧こぞうに持たせられしお筆に墨汁すみしたたか含ませ、我この塔に銘じ
 て得させん、十兵衛も見よ源太も見よと宣のたまいつつ、江都の住人十
 兵衛これを造り川越源太郎これを成す、年月日とぞ筆太に記しるしお
 わられ、満面に笑みを湛たえて振り顧かえりたまえば、兩人ともに言葉
 なくただ平伏ひれふして拝謝おがみけるが、それより宝塔長とこしなえに天に聳そびえて、
 西より瞻みれば飛檐ひえんある時素月を吐き、東より望めば勾欄こうらん夕べに
 紅日を呑んで、百有余年の今になるまで、譚はなしは活いきて遺のこりける。

青空文庫情報

底本：「日本の文学 一 坪内逍遙 二葉亭四迷 幸田露伴」中
央公論社

1970（昭和45）年1月5日初版発行

初出：「国会新聞」

1891（明治24）年11月～1892（明治25）年4月

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本に
そって修正し、組み入れました。

「五重塔 新字旧仮名」（入力：kompass、校正：浅原庸子）

入力：佐野良二

校正：川山隆

2009年9月11日作成

2013年3月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

五重塔

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>